

Title	1720 年代のゴットシェットとスイス派： とくに<das Sinnreiche>をめぐって
Author	南大路, 振一
Citation	人文研究. 26 巻 2 号, p.45-98.
Issue Date	1974
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

1720年代のゴットシェットとスイス派

—とくに <das Sinnreiche> をめぐって—

南大路 振 一

I

ゴットシェット Johann Christoph Gottsched (1700—66)¹ は14才の少年時代から東プロイセンのケーニヒスベルク大学で神学と哲学を修めた。18世紀のドイツでは、これは牧師の子弟にとって通常のコースである。しかし詩学教授ピーチュ Johann Valentin Pietsch (1690—1733) の影響もあって、彼の関心は次第に文芸へと移っていった。ピーチュは当時プロイセン第一の詩人とみなされていたが、彼はオーピッツの「自然らしさ」を理想として、ホーフマン・スヴァルダウやローエンシュタインなど、いわゆる「第二次シュレージエン詩派」の華美・誇張・奇矯・虚飾の趣味——ふつう <Phöbus>, <Marinismus> などとして総称される詩風と戦う闘士でもあった。若いゴットシェットはピーチュに手引きされて、オーピッツをはじめとする前世紀の修辞学と詩学（今日 <Barock-Poetik> と呼ばれるもの）を知るとともに、また、ホラティウスとボワローへも導かれることになった。ゴットシェットが文芸批評家として成長するにあたり、ピーチュの影響はきわめて大きかったと言わねばならない。こうしてゴットシェットは、1723年の春、或る哲学的・神学的内容の論文で学位を取得しておいてから、最年少の私講師として同大学で修辞学と詩学を講ずることになった。かたわら大学のそとでは説教活動をつづけたが、その雄弁は多くの人びとを魅了し、有為な神学者としても彼の名声は高かった。

このように輝かしい前途を約束されたかに見えるゴットシェットは、翌1724年の真冬の2月、とつぜん——なお大学生であった弟とともに——ザクセン国のライプチヒへと「逃亡」²する。ゴットシェット（と彼の弟）が人並はずれた体軀の持主であるために、プロイセン王の「巨人軍」に強制編入される危険が迫ったためである。もっともこの通説にたいしては異論がない

わけではない。生涯をゴットシェットの研究と称揚に捧げたE. ライヘルによれば、学者として、また詩人としての自己の将来をおもんばかったゴットシェットは、より広大な活動舞台をライプチヒに求めるために、前述の徴兵の「危険」を巧みに利用したのである、という。このライヘル説がどの程度の説得力をもつか、また、このライヘル説にたいし、さらに、「親プロイセン的な」ライヘルによるゴットシェット像の全般にたいし、最近の東ドイツの研究者たちがどのような反論をみせているか——いまそれを考察することはさし控えよう。われわれにとって重要なことは、その直接・間接の動機が何であったにせよ、ゴットシェットがライプチヒ——その頃ドイツの文化の中心であり、「小パリ」と呼ばれたライプチヒに移ったために、彼のそれ以後のあの多面的かつ精力的な活動が可能になったという事実である。

ライプチヒでゴットシェットが頼りにしたのは、まずメンケ Johann Burkhard Mencke (1674—1732) であった。彼はその頃ライプチヒ大学の進歩的な史学教授として知られていた。詩才にも恵まれ、Philander von der Linde⁴ のペンネームで筆をとる一方、詩の愛好家の集まりである Deutschübende poetische Gesellschaft 「ドイツ詩社」の総裁をつとめていた。メンケの知遇を受けたゴットシェットは、東プロイセン出身の「他国者」であったにも拘らず、ただちにこの詩社の正会員として入会を許された。彼がピーチュの愛弟子であったことが有力に働いたようである。1727年以後はその詩社の事実上の指導者である <Senior> として、幅ひろい出版活動について企画するようになった。⁵——メンケについては、彼がまた有名な *Acta Eruditorum* (1682—1782) の発行人であったことを忘れてはならない。すなわち、創始者である父オットーの跡をうけて、彼は生涯この全ヨーロッパ的な学界誌の編集にたずさわるのであるが、彼メンケの邸宅に寄寓して日常その仕事をつぶさに見ることのできたゴットシェットが、自身の将来のジャーナリスト的活動について多くの示唆を受けたことは想像にかたくない。

さてゴットシェットは、メンケの力添えもあって、1725年の春からライプチヒ大学の講壇に立つことに成功した。講義の内容は主としてヴォルフ Christian Wolff (1679—1754) の哲学にかんするもので、ケーニヒスベルク時代の熱心な学習がここで生かされたわけである。⁶しかしヴォルフ自身は前年の終りにプロイセン国王の決定でハレ大学を追われたばかりであり、さらに、プロイセン以上に保守的な当時のザクセンの精神的風土を考えると、ゴ

ットシェットのこの行為は画期的なものであったといえる。彼にはそれなりの自信があったのであろう。それはともかく、年を同じくして彼はいよいよ自分自身の雑誌を発行することにより、ドイツのひろい読者層にたいする啓蒙活動をも開始する。それが *Die vernünftigen Tadlerinnen* である。

これは18世紀前半にドイツで流行した例の「道德週誌」(*Moralische Wochenschrift*)⁷の一つであり、成立年代からいえば最初期に属するものである。その成立事情は後年ゴットシェット自身の回想からも知ることができる。——低ザクセンのハンブルクで詩人ブロッケス Barthold Heinrich Brockes (1686—1747) たちにより発行されている *Der Patriot* 『愛国者』(1724—26)⁹が好評を博するのをみて、知人のひとりがゴットシェットの協力をえて高ザクセンでも同様の道德週誌 (*dergleichen moralische Schriften*) を発行することを思い付いた。最初ゴットシェットは、自分には能力がないといって断わるが、知人の重ねての懇願に、もし協力者がもう一人みつければという条件で承諾する。この条件は満たされた。そこでハレの出版業者との契約もとのい、いよいよ翌25年の初めから発刊の運びとなった。この道德週誌に特色をもたせるため、三人の執筆者はそれぞれ聡明な女性——カリステ Calliste、フェリス Phyllis、イーリス Iris ——になりすまし、女性の目をとおして世相を観察し、その弊風をすどく批判するという趣向がなされた。 *Die vernünftigen Tadlerinnen* という邦訳しにくいタイトルはここに由来する。しかし或る些細なこと——ゴットシェットが暗示するところでは掲載順序についての不満から、二人の協力者は最初の数週で寄稿を中止し、けっきょくゴットシェットひとりが三人の女性として1725、26の両年にわたり、計104篇を執筆することになった。それはともかく、これら二人の知人——ハーマン Joh. Georg Hamann とマイ Joh. Fr. May は、ともに前述の「ドイツ詩社」の主要メンバーであった。したがって今日のわれわれからみると、*Tadlerinnen* には「ドイツ詩社」の外郭的な活動へと発展する可能性がないわけではなかった。この道德週誌のテーマの一つが、ほかならず言語問題であることを考えると、「ドイツ詩社」との内面的なつながりは明白である。

以上のような成立事情はそれとして、*Tadlerinnen* の評判は高かった。毎号の発行部数も1,000に達し、前記 *Patriot* と並んでドイツ語圏内における代表的な道德週誌とみなされた。1725年の52篇、1726年の52篇はそれぞれ年度が終わると一巻ずつにまとめられたが、これらは約10年後に再版され

(1738年)、さらに10年ののち三版として上梓された(1748年)¹⁰。このことは *Tadlerinnen* が18世紀前半に道徳週誌として果たした歴史的な役割をよく物語るものといえよう。しかし今われわれの課題は、この道徳週誌の内容のすべてを吟味・評価することではない。われわれの考察範囲は、ゴットシェットがこの道徳週誌のなかで、詩的な文体——当時の慣用的な言い方をすれば *<die poetische Schreib-Art>*——を特色づける「sinnreich な言回し」の本質を摸索した2篇だけに限定される。しかしこれらの2篇は次のような理由から歴史的に興味ぶかい。それは、アルプスのかなたのチューリヒで、ゴットシェットより一足はやく批評活動を始めていたボードマー Johann Jakob Bodmer (1698—1783) の文体を、ゴットシェットがここで手厳しく批判したことを契機に、ボードマーおよびその僚友ブライティンガー Joh. Jakob Breitinger (1701—76) とゴットシェットとの間には一連の論争が起るからである。18世紀ドイツ文学史でいう「ゴットシェットとスイス派の不和」——「ライプチヒとチューリヒの抗争」の前哨戦というべきものであるが、そこには両者が文芸理論家ないし文芸批評家として次第に成長する様子が見え、1720年代という、近代ドイツ文学の胎動期——言い換えれば、いわゆる「バロック時代」から「啓蒙主義時代」への移行期に人びとが直面した基本問題がいくつか具体的にあらわれている。

II

Die vernünftigen Tadlerinnen のI部、第34篇(1725年8月22日)は次のように始まる。——「わたしたちの非難の書は、道徳の教えのなかに紛れ込むさまざまな誤謬にだけ向けられているではありません。話し方と書き方のなかにも改善を要するものがたくさんあります。理性的な人びとは前者と同様、後者をも矯正しようとするものです。それは、彼らにとって無趣味な対話を聞いたり、愚劣な書物を読んだりするのは、誰か或る人の悪徳ぶりや作法のなさを目の前にするのと同様に耐えがたいことだからです。こういう次第で、これまでわたしたちの冊子のなかに、時としては、この種類〔話し方と書き方〕の誤謬を正す意見が入らないわけに行かなかったのです[...]」(Die Absicht unsrer Tadelschriften geht nicht nur auf die Fehler, so in die Sittenlehre laufen. Auch im Reden und Schreiben giebt es

viele Stücke, die einer Verbesserung benöthiget sind. Vernünftige suchen so wohl diesen als jenen abzuheffen; massen es ihnen eben so unerträglich ist, abgeschmackte Unterredung anzuhören oder ein elendes Buch zu lesen; als die lasterhafte Lebensart und ungeschickte Aufführung eines Menschen vor sich zu sehen. Unsre Blätter also musten auch zuweilen eine Erinnerung von dieser Gattung in sich halten.) ここには人間の精神生活ならびに社会生活と言語生活との密接不離な関係に注目したドイツ啓蒙主義の一つの特色がはっきり暗示されている。しかしこの1部、第34篇でゴットシェットが試みるのは、読者の言語生活一般の改善ではなく、とくに「sinnreich な文体にかんする二、三の誤った概念を読者の頭から取り払うこと」(unsren Lesern einige falsche Begriffe von der sinnreichen Schreibart aus dem Kopf bringen)である。ゴットシェット——die vernünftigen Tadlerinnenの一人としてはフュリス——をして今この試みを決意させたのは、さる読者から寄せられた一通の手紙である。ただし発信人が架空の人物であること、いやむしろゴットシェット＝フュリス自身であることは言うまでもない。道徳週誌では珍しくないこの手法によってフィロログス Philologus なる一人の文学愛好家 (ein Liebhaber der Beredsamkeit)¹に扮したゴットシェットは、次のような興味ぶかい疑問を提出し、そしてみずからこれに回答しようとする。

フィロログスは *Tadlerinnen* の熱心な読者であるが、なかでも彼の関心は——散文であれ韻文であれ——「よき文体」(die gute Schreibart)をテーマにしたものに向けられている。*Tadlerinnen* を執筆する「見知らぬ美しい女性たち」は、よき文体という点でフィロログスばかりでなく他の若い人びとにとっても師範 (Lehrmeisterinnen) となるに相応しいが、これまでフィロログスの欲求を満足させるほど頻繁にこの問題を扱ってはいない。それでも彼女たちがドイツの言語と詩について論じた数少ない諸篇は、思いがけぬほど彼を啓発し、多くの点で彼の観念を変えるにいたった。そこでいま、とくに「sinnreich な文体」について彼女たちの考えを求めようと決心する。そこには特別な事情があった。すなわち、「正直のところ、或る場合、場合にどの想念が sinnreich であるか、ないかを私はちゃんと言うことができます。しかしそれを説明するとなるとうまく行かないのです」(Ich gestehe es, das[daß] ich in gewissen Fällen gar wohl sagen kan, welcher Gedancke sinnreich sey oder nicht: allein wenn ich eine

Beschreibung geben soll, so will es nicht fort.) しかも「私はこれまで或るひとりの作家のこの言い方、あの言い方が *sinnreich* であるか、ないかについてよく口論をしました。私には *sinnreich* ということについて、他人がふつう私とはまるで違った観念をもっていることが分かります」(Ich habe oftmahls einen Streit gehabt, ob diese oder jene Redensart in einem Scribenten *sinnreich* sey oder nicht, und ich finde daß man sich ordentlich gantz andre Begriffe davon macht, als ich.)

すでにここで文章における〈*sinnreich* なもの〉の特異性がはっきり語られている。それは第一に、説明しきれない性質のものである。言いかえれば〈*sinnreich* なもの〉は非理性的な要素を含んでいる。第二に、その評価は万人に共通してはいない。言いかえれば〈*sinnreich* なもの〉は多少とも主観的である。これら二つの性質が相互に関連していることは勿論である。ここでわれわれは、18世紀前半のドイツであれほど問題にされた〈趣味〉(*Geschmack*) の概念を思い起こす。文章における〈*sinnreich* なもの〉はまさに〈趣味〉の領域に属するといえよう。しかも〈趣味〉の概念形成は当時のドイツだけには限られない、前世紀いらいの全ヨーロッパ的な課題であった。² 18世紀前半のドイツでこの問題を扱った代表的人物は、ドレスデン宮廷で式部官をつとめた詩人ケーニヒ Johann Ulrich von König (1688—1744) であるが、彼と彼の著作については本論文でも——ゴットシェットとスイス派に関連して——何度か述べることになるだろう。要するに *Tadlerinnen* が提出する「*sinnreich* な文体」の問題は或る広大な史的背景をもつと言って差し支えない。このことを念頭においたうえで、われわれはまずフィロログスを苦しめた実例そのものを観察してみよう。

第一の例として挙げられるのは、「その功績を貶めることは私には出来ない、或る偉大な低ザクセンの詩人 (ein grosser Niedersächsischer Poet, dessen Verdienste zu schmählern ich nicht im Stande bin) によるキリスト受難詩のアリアの一節である。この詩人が——*Der Patriot* の中心人物にもなった——ブロッケスであり、その受難詩がオラトリウム *Der für die Sünde der Welt gemarterte und sterbende Jesus*『この世の罪のために苦しみを受け、死に給うイエス』(1712)³ であることは比較的容易に推測され、また確認される。テレマン、ヘンデルなどの音楽家が競って作曲し、ハンブルク以外の多くの都市でも毎年のように上演されたこのオラトリウムは、*Tadlerinnen* の執筆者にも読者にも馴染ぶかいものであったと思われる。さてフィロログ

スが用|用する問題の個所は——

Heil der Welt, dein schmerzlich Leiden
Schreckt die Seel und bringt ihr Freuden,
Du bist ihr erbärmlich schön.

〔大意〕世の救いよ、汝のいたましい受苦は

ひとの魂を恐怖させ、ひとの魂に歓喜をもたらす。

汝はひとの魂にとって哀れにも美しい。

ここに「哀れにも美しい」と仮訳した <erbärmlich schön> が議論の対象である。「私の友だちの何人かはこの erbärmlich schön という言回しにすっかり夢中になり、その字母の一つ、一つに1ドゥカーテンの値打ちがある、とします」(Da sind nun einige meiner Freunde in diese Redensart, erbärmlich schön, so sehr verliebt, daß sie jeden Buchstaben eines Ducatens werth achten.) フィロログスはこれに同意できない。しかし「私がこれはラテン語学者たちが矛盾的修飾 *contradictio in adjecto* と呼ぶところの、まったく不自然な表現である、と彼らに言ってもまるで利き目がないのです。私が、いったい彼らは女性を *abscheulich angenehm* [いとわしくも快い] と形容するだろうか、と彼らに尋ねても無駄なのです。彼らはこの erbärmlich schön は比類ないものである、と言ってどこまでも譲りません。そして自分たちの意見を主張するために、この erbärmlich schön な表現の生みの親にこのことで寄せられた他の詩人たちの祝賀のことばを引合いに出すのです」(Es hilft gar nichts, wenn ich ihnen sage, daß dieses ein ganz unnatürlicher Ausdruck sey, den die Lateiner *contradictionem in adjecto* nennen. Ich frage sie vergebens: ob sie den [denn] wohl ein Frauenzimmer abscheulich angenehm nennen wolten? Sie bleiben allezeit dabey, das erbärmlich schöne sey was unvergleichliches, und sie berufen sich ihre Meynung zu behaupten, auf die Glückwünsche andrer Poeten, die dem Vater dieses erbärmlich schönen Ausdrucks deswegen gemacht worden.)

Die vernünftigen Tadlerinnen の初版(1725年)では<erbärmlich schön> の議論はこれで終わり、フィロログスは別の二つの実例へと移る。しかし第2版(1738年)では、フィロログスはこれまでの分量を上回るものを加筆して説明をつづける。それによると、この言回しは、受難の救世主の様相が或る面では「哀れ」でありながら、また或る面では——つまり信者の目には「美

しい」と映じる、ということと言おうとするかに見えるが、これは語法上 (nach den Regeln der Sprachkunst) 実際にはありえない。すなわちフィロログスによれば、なるほど形容詞に副詞を結合させた用例として、erschrecklich groß (恐ろしく大きい), gewaltig hoch (物すごく高い), unaussprechlich klein (名状しがたく小さい) 等々があるが、これらの意味するところは、die Größe eines Dinges ist erschrecklich (或る事物の大きさは恐ろしいばかりである), die Höhe ist gewaltig (その高さは物すごく高い), die Kleinigkeit ist unaussprechlich (その小さいことは名状しがたい) というに他ならない。ところが <erbärmlich schön> をこのように説明することはできない。「受難の救世主の美しさは erbärmlich schön であったこと (daß die Schönheit des leidenden Erlösers erbärmlich gewesen [ist]), すなわち、その美しさは「哀れな、みじめな、もしくは、甚だつまらない、下らない美しさ」 (eine elende, jämmerliche, oder sehr geringschätzig und schlechte Schönheit) と呼ぶべきものであったこと——詩人ははたしてこのようなことを言おうとしたのだろうか？ おそらくそれは詩人の意図ではなかったであろう。しかし詩人による <erbärmlich schön> という言回しが指示しうるのは、まさにこのようなことでしかなく、受難の救世主の美しさが或る面では erbärmlich であり、或る面では schön である、といったことではない。それは上述の „ein schrecklich großes Ding“ という表現が、その事物が或る面では schrecklich、或る面では groß と呼ばれるべきことを意味しえないのと同様である…。——フィロログスのこのような見解にたいして彼の友人たちは異議を唱えることができない。「しかも彼らは依然として意見を変えようとはせず、自分ではどうしても正当な理由づけのできない表現に感心する」 (Doch bleiben sie nach wie vor bey ihrem Sinne, und bewundern einen Ausdruck, den sie auf keine Weise rechtfertigen können.)

フィロログス=ゴットシェットが第2版でなぜ以上のような説明を補足したのか、その間の事情はわれわれには分からない。後述のとおり、やがてスイス派から原理面での弱さを手痛く指摘されたことが一因かも知れない。いずれにせよこれによって、ゴットシェット自身がこの <erbärmlich schön> という「sinnreich な言回し」をどのように理解したか、またどのようにしか理解できなかったかが明らかになったと思われる。しかしあらためてわれわれはこの表現をどう理解すべきであろうか？ それは容易な仕

事ではない。もとよりブロッケスのこのオラトリウムの文体分析が本論文の目的ではないから、ここでは範囲を問題のエリアだけに限って若干のことを述べるにとどめたい。まず、原文ではフィロログス＝ゴットシェットが引用する詩行にさらに次の3行がつづいて全体の詩節をなしている——

Durch die Marter, die Dich drücket,

Wird sie Ewiglich erquicket,

Und ihr graut Dich an zusehn.

〔大意〕 汝をさいなむ痛苦によって、

ひとの魂は永久に生氣をうけ、

そして汝をみては戦慄する。

これを通読するとき、この詩節の内容上の特徴をなす対照と矛盾がいつそう顕著になる。したがって <erbärmlich schön> はそれほど奇異なものとは感じられない。このエリアにすぐ先立って、詩人はシオンの娘をして、葦の棒で打たれたイエスの凄惨な頭を生々しく描写させている。その痛ましい受苦によってこの世に永遠の救い、喜びをもたらすイエスを詩人が <erbärmlich schön> と表現するのは、むしろ自然のことではないだろうか？ もしこれを「痛ましくも美しい」とでも訳すならば、現代のわれわれにはほとんど抵抗感がないかも知れない。——しかしこのような読み方が、仮にそれが誤りでないにしても、そのまま 1710 年、20 年代にあてはまるかどうかは別問題である。究極の解釈は <erbärmlich> という語の用例を歴史的に検討し、詩人ブロッケスの文体を綿密に分析してはじめて可能であろう。われわれにとっていま重要なのは、当時の人びとが何をどう読んだかをまず知ることである。そこで再び *Tadlerinnen* にもどって、フィロログス＝ゴットシェットが「sinnreich な言回し」の実例——しかも悪しき実例の第二、第三として挙げるものに注目しよう。

第二の例は、「その作品において前者に劣らず有名なもう一人の詩人」(ein anderer Dichter, der seiner Poesie halber nicht weniger berühmt ist) がカールⅫ世をボンメルンに迎えた「見事な」祝詞からの一行である。この詩人が誰であるか確認することはできないが、カールⅫ世とは、詩行の内容からいっても、北方戦争(1700—21)で勇名を馳せた若きスウェーデン王(1682—1718)のことと思われる——

Ein Strahl aus Strahlesund macht Belt und Sund gesund.

Strahlesund (=Stralsund) がバルト海に面する都市、Belt と Sund は

それぞれドイツとデンマーク、デンマークとスウェーデンを隔てる海峡であることは言うまでもない。地名を <Wortspiel> に使い、行内押韻までしたこの技巧的な一行を、フィロログスは容認することができない。この有為な詩人は聡明な人物でもあるのだから、大金を払ってでも、このように没趣味な (abgeschmackt) 一行を自作のなかから買いとるべきだ、と彼はたえず主張する。しかし——「しかし私の知人たちはこの遊びの詩行にすっかり魅惑され、この詩行を作品全体で最もうるわしい^{はな}華とみなしております」(Allein meine Bekannte sind durch den spielenden Vers so bezaubert, daß sie ihn vor den schönsten Zierrath des gantzen Werckes halten.)

第三の例は散文であり、『死者の対話』の最新号から次のような一節が採られる—— daß alle Projecte welche von wohlgesinneten vernünftigen Männern desfalls (wegen der Religionsvereinigung) gemacht worden, an denen Klippen des Geistes des Unfriedens stranden müssen (このこと〔宗教の統一〕のために、善意と理性をもつ人びとによってつくられた計画が、すべて不和の精神の暗礁に乗りあげねばならないこと)。フィロログスにはこのような言回しがまったく不当に思える。ここでは互いに反撥する想念と言葉が結びつけられている。「統一の計画」と「暗礁に乗りあげる」とはそぐわない。「不和の精神」が「暗礁」をもつことがどうして可能なのか…。しかし或る会合の席でこのような意見を述べたフィロログスはたちまち何人かから反撃をうける——「これこそは世界のうちで最も sinnreich な想念だ！」(Das ist der sinnreichste Gedancke von der gantzen Welt!) と。また或る者たちは、この個所のもつ美しさを認識しえないフィロログスの無力さを憐むのだった。彼らにとっては「これはおよそ考えうる、もっとも美しい隠喩であり寓意である」「daß dieses die schönsten Metaphoren und Allegorien wären, die man nur erdencken könnte.) ——この第三の例になると現代のわれわれの抵抗感はいよいよ少ない。むしろフィロログス=ゴットシェットの反対者たちと共に、われわれもまた彼の鑑賞力の限界に憐みをおぼえるかも知れない。しかし前述の <erbärmlich schön> についてと同様に、これ以上の批判はさし控えて、フィロログスが一転して鋒先をスイス派に向けるのを見てみよう。スイス派にたいするゴットシェットのあからさまな挑戦はおそらくこれが最初であろう。しかもその仕方は——以下のとおり——かなり手がこんでいて、ゴットシェットについて言われる「陰険さ」の一面をうかがわせる。

「心から尊敬する Tadlerin たちよ、たぶんあなた方が私にあのスイスの画家たちの意見を求めるようお勧めになることは、私にはほとんど予想がつきます。彼らの冊子で詩のことを論ずるとなると、いつも彼らが想念のきびしい審判官を演じたことは周知のとおりです。なかでもルーベーンは——世間でよく言うことですが——ノミが咳をするのを聞き、草が伸びてゆくのを見る、といったせんさく屋です」(Ich sehe es fast zum voraus, wehrteste Tadlerinnen, daß ihr mich auf die Schweitzerischen Mahler verweisen werdet. Es ist bekannt daß dieselben scharffe Richter der Gedancken abgegeben, so oft sie in ihren Blättern auf die Poesie gekommen sind. Rubeen ist insonderheit ein solcher Grübler, der, wie man zu sagen pflaget Flöhe husten höret, und Gras wachsen siehet.) 「スイスの画家たち」とは、チューリヒの道德週誌 *Die Discourse der Mahlern* 『画家談論』(1721—23)の同人たちを指し、ルーベーン(＝ルーベンス)は、このグループを主宰するボードマーの筆名である。フィロログスはこの *Discourse* の説くところが詩における彼の趣味の変化に役立ったことを否定しはしない。かつて愛誦したものが今は味気なく思われ、また、ずっと遠ざかっていたため今では思い出せないものさえある。その実例がノイキルヒ Benjamin Neukirch (1665—1729)のいくつかの作品である。⁷しかし「こういったことにも拘らず、私にはあの画家たちは sinnreich な文体の正当な審判官とは思えません。他人について非難するその欠点を背負っている者たちの判定を、どうして受け入れることができるでしょう。ルーベーン氏はフェーブス、ガリマティアス、ことばの遊びについて叱責することしか知りません。しかし自分がこれらの技法における大家であることは知らないのです。ともかく *Discourse* II 部、第1篇で彼が喜びの国を描写したものをお読みになってみるがよろしい」(Dem allen ohngeachtet scheinen mir die Mahler nicht die rechten Richter der sinnreichen Schreib-Art zu seyn. Wie sollte ich das Urtheil derer annehmen, die mit eben den Fehlern behaftet sind, so sie an andern tadeln? Herr Rubeen weiß von nichts als Phöbus, Galimathias und Wortspielen zu schreyen, weiß aber nicht, daß er selbst ein Meister in diesen Künsten ist. Leset doch seine Beschreibung die er vom Reiche der Freude im I. Discourse des andern Theiles gegeben.)

III

Die Discourse der Mahlern『画家談論』¹の成立事情などは後述することとして、いまはそのⅡ部、第1篇の『喜びの国』(Das Reich der Freude)そのものを一瞥し、フィロログス=ゴットシェットが問題にする若干の表現をまず紹介しておこう。——うるわしい牧歌的な自然のなか、丘のうえの一本のカシの木蔭で今日もルーベーンは「不断の伴侶」「ドイツ最大の詩人」オーピッツをひもどく。その描写するところの田園はいま眼前の風物とすっかり融け合う。夢心地に誘われたルーベーンはやがて「快さに疲れて」(von dem Ergetzen ermüdet)深い眠りにおちいる。すると羊飼ひ姿のオーピッツその人があらわれ、彼を「喜びの園」へと案内する。それは永遠の春が支配する豊穡の樂園であり、そこには「徳の娘である浄福」(die Glückseligkeit / eine Tochter der Tugend)によって愛でられた少数の老人と若者が、美しい女性であるニンフたちと一緒に、憂いのない日々を送っている。心身ともに若々しいその老人たちはアナクレオンを思わせる。住人たちは掟なくして正しいことを行ない、いっさいの悪徳は影をひそめる。この国の女王である「喜び」(FREUDE)は「青春」「婚姻」「たわむれ」「平安」「貞潔」「健康」「ミューズ神」にかしずかれる最美のニンフである。この「喜び」に接吻されたところでルーベーンの夢がさめる…。

一般に夢(幻視)は道德週誌が好んで用いた表現形式であり、ここでルーベーン=ボードマーはその限られた詩才をかたむけて、自然と人間生活の理想的形姿としての「喜びの国」を描く。古代以来の *locus amoenus*「悦楽境」²の諸要素がふんだんに使用されるのはともかく、先師による別世界への案内のモチーフにいたっては、ウェルギリウス-ダンテとオーピッツ-ボードマーの二組を思い浮かべて、われわれは微笑を禁じえない。ところで聡明な Tadlerin たちにたいし、フィロログスがこの描写でとくに問題にする表現は七つあるが、これを *Discourse* の原文に即して列挙すると——

1) [O Freund meiner Poesie!] lasse deine Augen über dieses lustige Land hin spazieren [...] (S. 3)

2) [...] Hügeln [...] auf welchen Blumen ihre Häse hervorreckten / die die heitersten Strahlen der Morgenröthe nachmahlten [...] und die Gerüche von Balsam / Weyrauch und Myrrhen in unsere Nasen bließen. (S. 4)

- 3) [die Jahrs-Zeiten verändern unsere Felder nicht /] der Hundes-Stern hat niemahls unsere Saat verbrennet /
 4) und der kalte Nordwind hat niemals unsere Wälder ihres grünen Haares beraubet. (S. 6)
 5) unsere Blumen / die ungepfleget hier wie Rubinen brennen / dort ihre Blätter mit Atlaß und Damast schmücken. (S. 6)
 6) der Winter selbst hat uns [seinen Schnee und] sein gläsernes Eiß geschencket / das er [vor unser Gesicht] auf diese hohe Berge [in dem Norden] getragen. (S. 7)
 7) Sie [=die Freude] säet über alle Objecte die sie berührt einen neuen Glantz. (S. 8)

このうち1)は「喜びの国」への途上、すでにこの世のものとは思えぬ景観におどろくルーベーンに語りかけるオーピッツの言葉であり、2)以下はすべて一人の美しいニンフによる「喜びの国」の説明である。フィロログスによれば、1), 2)はまさにルーベーンが前述の詩人ノイキルヒを笑い草にする大仰な表現 (hochgetriebene Redens-Arten) にほかならない。さらに3)以下にいたっては、ホーフマンスヴァルダウやローエンシュタインたちの「不自然な想念と表現」を「山猫のように眼を光らせて追及する」あのルーベーンをどう考えてよいか分からなくなる、とまでフィロログスは極言する。そして Tadlerin たちに「慧眼のルーベーン氏」をして彼自身のこれらの言回しを弁明させるように乞う——「彼の釈明は同時に、彼によって非難された詩人たちを正当づける」ことは確実であるから⁴...

この——約4頁にわたる——手紙を受け取った Tadlerin フェリスつまりゴットシェットは、多くの点でフィロログスと意見を同じくすることを認めながらも、フィロログスが大家たち (grosse Männer) にたいする批判をあえてしたことに遺憾の色をみせる。大家とその弟子たちとは区別されねばならない。弟子において欠点であるものは、大家においては他の多くの長所にかくれて目立たない。たとえて言うならば、醜女における傷あとは彼女をいっそう醜くするが、美女にところどころあざがあっても恋人は依然として彼女を美しいと思うだろう。それどころか、この欠点を美点だと公言するかも知れない。フィロログスの手紙で、あのような悪しき「sinnreich な文体」を感嘆する群小詩人たちは、この恋人と類を同じくしている。しかしそれだけに——と、フェリスはつづける——初心者が大家たちの欠点を真の美点と

思い込むことがないよう警告する必要がある。こういった事柄での悪しき趣味はすぐに蔓延するし、また、名士たちの手本 (die Exempel berühmter Männer) が及ぼす害はいっそう大きいから…。

ルーベーン氏については、同氏が隠喩の使用において時たま行きすぎて、そこから、隠喩についての彼の見解が不確かだという結論は出てこない。たまたま自分自身の認識にそむいて行動するというのは、ありがちなことである。もしかするとルーベーン氏は、あれは夢の描写であるのであのように自由なことをやったのだ、と弁解するかも知れない…。

フィロログスとしてスイス派 (ボードマー) を攻撃したゴットシェットは、一方このようにスイス派 (ボードマー) を弁護する。これによって自分の優勢な立場を相手にも、そして第三者にも印象づけようとするのである。ここにわれわれは、ゴットシェットについて言われる「尊大さ」の一面を感じとってよいかも知れない。

ところで <sinnreich なもの> についての Tadlerin たち——すなわちゴットシェットの考えはすぐには示されない。フュリスはそれが「まだ十分明確にはなっていないこと」 (daß wir es noch nicht zu einer völligen Deutlichkeit gebracht [haben]) を告白する。フィロログスと共にわれわれも次の機会——すなわち 3 週間さきの第 37 篇 (1725 年 9 月 12 日) を待たなければならぬ。

IV

フュリス=ゴットシェットの考察は「よき文体」 (eine gute Schreibart) についての一般論からはじまる。それは、「sinnreich な文体」も本来「よき文体」に包括されねばならないからである。そこで第 37 篇のモットーとして、カーニッツ Freiherr von Canitz (1654—99) の『諷刺詩』第 3 (*Von der Poesie*)¹ からの一節が引用される——

Man redt und schreibt nicht mehr was sich zur Sache schicket,
Es wird nach der Vernunft kein Einfall ausgedrückt,
Der Bogen ist gefüllt eh man an sie gedacht,
Was groß ist das wird klein, was klein ist groß gemacht,
Da doch ein jeder weiß, daß in den Schildereyen

Allein die Aehnlichkeit das Auge kan erfreuen;

Weil eines Zwerges Bild die Artigkeit verliert,

Wenn man es in Gestalt der Riesen aufgeföhrt.

〔大意〕ひとはもはや事物に即したことを語らず、書かず、

理性にしたがって表現される着想はなく、

理性のことを考えるよりはやく紙片は満たされ、

大きなものは小さくなり、小さいものは大きくされる——

誰しも知るとおり、描写においては

〔原物と模倣との〕類似だけがひとの眼を楽しませるというのに。

侏儒の姿も、もし巨人になって登場するなら、

可愛らしさは失われてしまうのだ。

そしてここから、よき文章家 (ein guter Scribent) の守るべき根本規則として、1) 自然らしく書き (natürlich schreiben), 2) 理性にしたがって書き (vernünftig schreiben), 3) 拡大と縮小において節度を保つ (in Vergrößerung und Verkleinerung Maaß halten) の三つが引き出される。3) の「拡大と縮小」は、修辞学でいう *amplificatio* ならびに *hyperbole* に相当するが、ここでは、ひろく比喻・比較による強調や誇張をさすと考えてよいだろう。さて「sinnreich な文体」においても——それが「よき文体」である限りは——思考と表現の相即性を至上とするこれらの規則は守られねばならない。しかし「sinnreich な文体」が成立するには、これ以外に「なお若干のもの」(noch was mehrers) が必要であるように思われる。それは何だろうか？ まずフュリス＝ゴットシェットはドレスデンの宮廷詩人ベッサー Johann von Besser (1654—1729)² が亡き愛妻の生涯を記した中から、良風美俗の都市ライプチヒを „die Mutter und Säugamme, beydes der Musen und Gratien“ (ミューズ神と優美神たちの母にして乳母) と呼んだ例、また、亡き妻の父(高名の司法官でライプチヒ市長)は——生涯もった3人の妻との間に——15人の子をつくりながら、娘は2人しかなく、しかも成長したのは彼女だけであった事実を叙べて、 „So werden die Edelgesteine nur einzeln gefunden; und so sparsam war das Verhängniß gegen denjenigen mit Töchtern, der das gemeine Wesen zur Tochter hatte“ (「このように宝石は一つ、一つというふうにはしか見つからない。そしてこのように運命は、国家・社会をわが娘としていたこの人物にたいし、娘を恵むことにやさかであった」) と表現した例を <sinnreich> として引用する。

つづいてカーニッツがブランデンブルク選挙侯の太子妃ヘンリエッテ³の死に寄せた弔詞 *Klage-Rede* (1683) から、忠実な臣民たちの悲嘆を際立たせるための次の一節が引用され、その想念と言回しこそ <sinnreich> そのものである、と断言される—— „Der Untergang eines Tyrannen entdeckt ein Frohlocken bey allen; daß auch ein sterbender Herodes sein Testament zu einem Blut-Urtheile machen muß, damit, wo nicht sein Abschied, doch zum wenigsten das Andencken seiner Grausamkeit nasse Augen verursachen möge. Da ist nichts gemeiners, als daß man die Lobschriften und Ehrenpforten mit Füßen tritt, daran Heucheley oder Zwang gearbeitet hat.“ (「暴君の死は万人のあいだに歓呼を湧き上がらせる。それでヘロデのような人物でさえ臨終のとき遺言を死刑宣告書にしなければならぬ⁵。つまり彼の死が——というのでなくても、少なくとも彼の残虐さの思い出が人びとの眼を濡らすためにである。このような場合には、伴りと強制の手になる頌詞と凱旋門を踏みにじること以上に当然なものはない。)」)

これらの実例を並べたあとでも、フュリス＝ゴットシェットは、「sinnreich な文体」に特有なものを、一挙に、数語で把握することを避け、さらに具体的な注意を重ねることによって説明しようとする。これが事柄そのものの難しさによることなのか、それとも一般読者のレベルを考慮してのことなのか断定はできない。いずれにせよ議論はかなり平板である。しかしここで列挙される実例の鑑賞の仕方をめぐって、やがてスイス派がゴットシェットの<趣味>を批判することになるので、われわれはしばらく彼の説くところに耳をかたむけよう。

まず読者は次のことに注意をうながされる——すなわち、「<sinnreich> という語そのものが、すでに、そのような表現が<Witz> に満ち、想念に富んでいなければならず、それによって読者にいろいろ考えさせる、ということを暗示している」(Das Wort sinnreich selbst scheint schon anzudeuten, daß ein solcher Ausdruck voller Witz, und reich an Gedancken seyn müsse, so daß er einem Leser viel Nachdenckens verursache.) たしかに前掲のベッサーとカーニッツの例がそうであった。しかしここに現われた<Witz> という重要な語の意味内容がせんさくされ、これらの実例が原理的に検討しなおされるというのではない。この点をやがてボードマーが鋭く批判するのであるが、それは後述する

ことにしよう。いまフュリス＝ゴットシェットはただちに次のような警告を発する——「しかし理解が困難な、いや、まるで不可能なすべての著者を、彼らがいろいろと考える機会を与えるからといって、sinnreich だとはしないように、よく気をつけるがよい」(Man nehme sich aber wohl in acht, daß man nicht alle Scribenten die schwer, oder auch wohl gar nicht zu verstehen sind vor sinnreich ausbebe, weil sie zu vielem Nachsinnen Gelegenheit geben können.) その一例としてヤーコブ・ベームの *Morgenröthe*『曙光』の一節が引用される。ベームの神秘主義的な自然論は、ゴットシェットにとって <sinnreich> ではなく、<unsinnig> の一語につきる。⁷要するにこれは「sinnreich な文体」ではなく「dunkel な文体」である。

「sinnreich な文体」のもっとも主要な要素が比喩的な言回し——<verblünte Gleichnisreden> にあることは前掲の例からみても明らかである。フュリス＝ゴットシェットはさらにカーニッツとベッサーの例を一つずつ追加したのち、比喩的な言回しが <sinnreich> であるための三つの注意を与える——1) その比喩が実際に比喩になっていること(たんなる gleichwie, also での連結は不可), 2) 陳腐ではないこと(太陽を比喩として安易に使う悪習), 3) あまりにも高いもの、あまりにも低いものから採られてはならぬこと(hyperbole における節度)。そして、これらの規則にことごとく背いた実例として或る領邦議会が国王に捧げた「誓忠の辞」(Huldigungsrede, いわゆる Gegenrede) が紹介される。この「誓忠の辞」にみられる数々の不自然な、生硬な言回しにたいする批判は、われわれをも困難なく承服させる。自然科学的な不合理さは詩と弁論においても許容しまいとするゴットシェットの態度が印象的である。彼は「健全な理性」にもとづく、冒頭に掲げた三つの根本規則をあくまで守ろうとする。

次にフュリス＝ゴットシェットは、想念そのものが多少とも <sinnreich> である前述の諸例にたいして、きわめて平明な真理、ありふれた事実を内容としながら、表現の巧妙さによって <sinnreich> となった若干の例をあげる。ブロッケスが守銭奴の暮しぶりについて、「あの愚か者は富んで死ぬため貧しく暮す」(Der Narr lebt arm um reich zu sterben) と評するような場合、同じくブロッケスが人はすべて死ぬ定めにあるという事実を、「死は牧人の賤が屋にも、大帝の宮居にも押し入る」(Der Todt durchdringt sowohl die Schlösser grosser Kayser, / Als schlecht gebaute

Hirtenhäuser) と叙べる場合、また、ベッサーが恋人のメリンデにたいし、
 <Herz> を「愛情」と「勇氣」の二義に使い分けて、「もし私にたいして
 <Herz> がないなら、私を憎む <Herz> ももたないでほしい」 (Nur,
 hast du ja kein Hertz für mich? / So hab auch keines mich zu hassen.) と
 哀願する場合などがそれである。ただし最後の、ことばの遊戲 <Wort-
 spiel> については、フュリス=ゴットシェットはその甚しい乱用を戒め
 ることを忘れない。しかも興味あることに、「簡単のために」 (der Kürtze
 halber) 読者はスイス派の *Discourse* を参照するように、と勧められる。⁸

<sinnreich> な想念のまた別の種類として、適度の誇張 (eine geschickte
 Vergrößerung einer Sache) にもとづくものがある。カーニッツが前記の太
 子妃のための弔詞で、 „daß sich die Lehrer selbst über ihre Wissenschaft
 verwundert, und daß auch die unsträflichsten durch ihren Wandel
 erbauet worden“ (「彼女の博識には教師自身が驚嘆し、非の打ちどころのな
 い者たちでさえ彼女の行状によって感化された」) と賛え、同じカーニツ
 ツが亡き妻の有徳について、次のように歌ったのが実例とされる⁹——

Manches Weib wird hochgepriesen,

Das kaum soviel Tugend zehlt,

Als die Seligste vor diesen,

Aus Bescheidenheit verhehlt.

〔大意〕多くの女性が称揚される——

浄福をきわめる故人が

謙遜して彼女たちの前では見せなかった、

その徳ほどの徳は具えていないのに。

これに反して、或る詩人¹⁰がアレクサンドロス大王について、その広大な胸
 のなかの一隅に全世界はすっぽり納まり、その上なお全世界が六つゆったり
 入るほどだった云々、とするのは、かなり行き過ぎた誇張といえよう。しかし
 このような誇張も、事物を戯れに滑稽化する場合には有効である。たとえば
 フィランダー (=メンケ) は、「キュプロス島の皇帝」で法螺吹き^{こうべ}のブラマル
 バスが、「無数の月桂樹の若枝を頭に¹¹いただいて、巨人がするように、両膝
 ついて扉をくぐり抜けてゆく」様を諷刺する…。

以上のように、Tadlerin の一人フュリスに扮したゴットシェットは、も
 っぱら実例を挙げるにとどめ、それ以上のことは、さしあたり例の道徳週誌
Der Patriot が「よき文体」を扱ったものを参照するように、と言う。¹² そし

てみずからも、「この啓蒙された著述家」(dieser erleuchtete Scribent)がこの種の論説によってドイツの弁論家、詩人、著述家の趣味を改善せんことを懇請して、第37篇を結んでいる。

V

Die Discourse der Mahlern『画家談論』(1721—23)の発行で中心的な役割を果たした青年ボードマーには、その経歴と活動において、ゴットシェットに似た点が少ない。¹彼もまた牧師の子として生まれ、はじめ牧師となるべき道を歩んだにも拘らず、半ばにして文芸へと方向を転じ、啓蒙主義の潮流のなかで活潑な批評活動をはじめた。彼の場合、その舞台は厳格なカルヴィニズムの支配するチューリヒであり、ボードマーはその根づよい反世俗的・反文化的な風潮のなかであって、新しい時代が要求する文芸作品の成立のために——原理と実践の両面から——努力した。²彼が神学生時代に知り合ったブライティンガーはそのまま聖職者となったが、文芸に関心をもつ、当時の新しいタイプの神学者として生涯ボードマーと異体同心の活動をつづけた。彼らの最初の、そして彼らの将来を興味ぶかく暗示する著作が *Discourse* である。

時間的には *Discourse* は18世紀にドイツ語圏で発行されたほとんど最初の道徳週誌であり、この意味で歴史的な価値は少なくない。そのモデルとなったイギリスの *The Spectator*『スペクテーター』(1711—12, 1714)をボードマーが知ったのは、おそらく1718年の夏、ジュネーヴ(もしくはリヨン)のことであったと推定されている。すでに神学を離れていた彼は、将来、絹織物の商人として生計を立てるため、南フランスと北イタリアへの研修旅行の途上にあった。その *Spectator* は原書ではなく、1714年にアムステルダムで印刷されたフランス語による抄訳であり、注目すべきこととして、ミルトンに関する重要な諸篇などは省略されていた。³しかし青年ボードマーの感激は大きく、やがてブライティンガーたちの協力をえて、約3年ののち「スイスの『スペクテーター』」もしくは「チューリヒの『スペクテーター』」として *Discourse* を発行することができた。⁴これとともにボードマーは商人への道をも断念して、ひたすら文筆に専心することになった。*Die Discourse der Mahlern* という一見、奇妙なタイトルは、前述のとおり、寄

稿者たちが著名な画家の名前をペンネームとして世相の描写を行なったことに由来する。⁵

Discourse は4部、94篇からなるが、もともと道德週誌であるため、狭義の文芸論はそれほど多くはない。もっとも重要なのは、当時の自然模倣説と、それに関連して多少とも想像力の機能を素朴なかたちで述べたⅠ部の第19/20、Ⅲ部の第21、Ⅳ部の第17篇などであるが、それ以外に前述のⅡ部、第1篇のような一種の詩的創作も若干ふくまれている。今日のわれわれが全体として *Discourse* を *Spectator* そのものと比較するならば、内容と文体において後者がはるかに優れていることは容易に結論されよう。ことに文体の点では、同じドイツ語とはいいいながら、ゴットシェットの *Tadlerinnen* との隔たりも一読して明らかである。しかしボードマーたち——いわゆるスイス派には「道德週誌」を大陸で最初に発行したという誇りがあった。⁶ したがって、彼らより一足おくれてハンブルクで発行された *Der Patriot* とハレ(つづいてライプチヒ)で発行された *Die vernünftigen Tadlerinnen* が好評を博することに彼らは無関心ではありえなかった。しかもこれらの道德週誌から否定的な評価を受けたことは、彼らにとって少なからず不快であったと思われる。ことに文体にかんする批判が、スイス人である彼らのいわば急所をついたことは想像にかたくない。彼らは反撃を試みずにはおれなかった。それは1725年ごろに執筆された二つの書物においてであり、両者は内容的に互いに関連している。

その一つ、*Von dem Einfluß und Gebrauche der Einbildungs-Krafft*『想像力の影響と使用について』⁷ は1727年に匿名で出版された。著者がボードマー、ブライティンガーのいずれであるかについては従来いくつかの説があるが、今われわれにとっては、両者の密接な協力のもとに執筆されたということだけで十分である。内容としては、冒頭に哲学者ヴォルフへの献辞があり、以下23の章において文芸作品の三つの主要ジャンル——叙事詩、抒情詩、劇から主としてドイツの実例をとりながら、詩人の創作能力としての想像力の働きを考察している。もちろん、ここでいう想像力は——例えばゲーテについて言われるような——創造的 (schöpferisch) な想像力ではなく、18世紀初期にヴォルフの心理学などで規定された想像力——すなわち、外界からの印象を受け、貯える場となるとともに、さらにその貯えられた印象を時に応じて意識によみがえらせる、一種の想起能力としての想像力であることを忘れてはならないが、スイス派においては——先にも触れたとおり——

—すでに *Discourse* のⅠ部、第19 / 20篇⁸にこの想像力の働きが——自然模倣説の観点から——述べられている。しかしいま取りあげた『想像力について』では、*Discourse* での想像力が次第に創造的な想像力へと質的に変化してゆく過程がうかがわれる。⁹例のロンギノスの『崇高について』に拠りながら、想像力の自由な飛翔を「詩的熱狂」(der poetische Enthusiasmus)として把握した最終章は、後年のスイス派をすでに指向している。つまりゴットシェットとの相違もかなり明確であると言えよう。

しかしスイス派が *Tadlerinnen* におけるゴットシェットに反論するのは、もっぱら前記のヴォルフへの献辞においてである。ヴォルフその人との関係は、スイス派のほうがゴットシェットよりも早かった。すなわち、1722年の夏に *Discourse* のⅠ、Ⅱ部が、当時ハレにおいて神学者たちとの激烈な戦いのさ中にあったヴォルフに——あつい敬意のこもる手紙を添えて——送付されている。¹¹ヴォルフは青年ボードマーとブライティンガーにとっても啓蒙運動の偉大な導きの星であった。したがって『想像力について』の献辞が、まもなく起こったヴォルフの受難(ハレからの追放)にたいする義憤と、その不幸にも拘らず彼の著作がドイツ人のあいだで高く評価されるであろうという慰めで始まるのは不思議ではない。しかし今われわれに重要なのは、若いスイス派が批評家としてヴォルフの哲学から何を学んだか、である。彼らの言葉によれば、それはヴォルフ哲学の特色をなす論証的方法(die demonstrativische Art zu philosophieren)である。すなわちスイス派は、数学におけるように、厳密に定義された概念を使用して整然たる論理を構成する方法を、文芸批評の領域に応用しようとする。「文学のあらゆる部分を数学的な確実さで詳述し、すぐれた著作がわれわれに与える快感、ならびに、悪しき作品がわれわれを無感動のままにしておくその無感動の真の源泉を探索すること」(alle Theile der Beredtsamkeit in mathematischer Gewißheit auszuführen / und den wahren Quellen so wol des Ergötzens / das uns gute Schrifften geben; als der Kaltsinnigkeit / in welcher uns schlimme Wercke stehen lassen / nachzuspühren.)が若いスイス派の壮大なプランである。その内容は——人間の主要な精神能力に対応して——5部からなり、その第Ⅰ部をなすのがこの『想像力について』にほかならない。これ以外の4部がその後どのように実現したか——或いはしなかったか、それはここでは省略しよう。¹²要するにスイス派が目指すのは、文学作品について、「ことばの外的な形式」(die äusserliche Form der Rede)だけでなく、その「原理」

(Grund-Sätze) をも教授する書物を著わすことである。従来のドイツにはこのような書物がないために、真に「批判的な規準」 (die critische Wage) をもった批評家がまだ存在しない。そこでの判断は「確実な基礎による」 (auf einen gewissen Fuß) のではなく、ただ「当てずっぽ」 (auf gerathe hin) にすぎない。そしてそのことの証左としてスイス派が挙げるのが前述の *Die vernünftigen Tadlerinnen* の1部、第34篇におけるゴットシェットである。スイス派は——われわれが前にみた (p. 5) ——フィロログスの告白、「正直のところ、或る場合、場合にどの想念が *sinnreich* であるか、ないかを私はちゃんと言うことができます。しかしそれを説明するとなると、うまく行かないのです云々」を全文引用する。そして彼らがとくに怒るのは、まさにこのような批評家が「ひじょうな自惚れをもって」 (mit grossem Eigen-Dünkel) 或る作者、また或る個所を「根拠なくして」 (unbegründet) 或は称揚し、或は排斥することである。「このような批評家が人びとの趣味を改善するであろうとか、また、真の、哲学的な名文がこれらの手引き者によって樹立されるだろうとか期待するのは、まことに愚いことである」 (Es ist für wahr eine Thorheit zu hoffen / daß dergleichen Critick-Verfasser den Geschmack verbessern werden / daß die wahre und philosophische Wolredenheit von diesen Anführern werde hergestellt werden.) スイス派は、これらの批評家によってまず詩人たちが、言葉の意味よりは言葉の響きに——「事柄」よりは「言回し」により大きな関心を払うようになり、そのことによって未熟な読者が欺かれるだろう、と¹³ 予言する。

『想像力について』では、これ以上 *Die vernünftigen Tadlerinnen* にたいする反論はみられない。要するにここでは、「批評家」ゴットシェットの原理的な弱点をつくことによって、いわば間接的に自己を防御し、文体上の個々の問題にかんする釈明は別の、もう一冊の書物にゆずるわけである。しかしそれに入る前に、この『想像力について』にたいしてゴットシェットがはやくも見せた反論をできるだけ簡単に述べておこう。それは彼が *Tadlerinnen* に引きつづいて発行した道徳週誌 *Der Biedermann* においてである。

Der Biedermann は1727年から28年にかけてゴットシェットの独力で発行された。¹ タイトルは字義どおり「誠実、実直な男」を表わし、2部100篇(各50篇)からなる。その1部、第56篇(1728年5月31日)でゴットシェットはふたたび読者フィロログスに扮して弁明と、あらたな攻撃を試みるのである。しかしそれに先立って彼は、発行人ビーダーマン氏として次のように断わることを忘れない。すなわち、フィロログス氏が「スイスのさる有名な学者にたいして」(gegen einen berühmten Gelehrten in der Schweiz) なす弁明の部分はともかくとして、同氏が相手の欠点を攻撃する個所では、編集者として、表現をいくぶん柔げざるをえなかった。それはフィロログス氏が、相手の欠点をそのままスイス国民全体の責任にしようとするからである。「しかしこの過失は批評の愛好者にとっては極めて避けがたい」(Doch ist dieser Fehler den Liebhabern der Critick sehr schwer zu vermeiden.) ——自己の優位性を一般読者に印象づけるゴットシェットの巧みな手法である。

フィロログスはライプチヒでのこの春の書籍市で『想像力について』を見つけ、その著者(たち)が *Discourse* の「画家たち」であると推定した。フィロログスからみると、批評家として若干の声価をえた彼らは、いまや増長してドイツ全体に睨みをきかせる批評家となり、多くの詩人や著述家を威嚇しようとする。「ただただ私には、怒れる批評家[...] ルーベーン氏がこわい顔付きで、鞭を手にし、雪に覆われた彼のアルプスから降りて来て、恐ろしい声で、愛らしいスイス方言で、節にかかったわが国のすべての著者たちに追放に重ねて追放を宣するのが見えるような心地がします」(Mich dünckt nicht anders, als sähe ich den erboßten Critick-Verfasser [...] Herrn Rubeen, mit einen grämischen Gesichte und der Ruthe in der Hand, von seinen beschneyten Alpen herunter gestiegen kommen und mit einem fürchterlichen Thone, in einer lieblichen Schweitzerischen Mundart, alle unsre Scribenten in die Critische Acht und Oberacht erklären.)

フィロログス=ゴットシェットの文章は全体として軽妙であり、それ自体「sinnreich な文体」の一例にもなりそうである。彼はこの「博学、多読のスイス人」がその『想像力について』で述べることをすべて拒否しようとはしない。「その大部分はなかなかよく書かれております。しかし私たちドイツ人がそれを言うてもらうのに、わざわざスイス人の師を必要としたという

ほど新しく、未聞というのではありません」(Das meiste davon ist gar wohl geschrieben; aber so neu und unerhört doch nicht, daß wir Deutschen eben eines Schweitzerischen Lehrmeisters nöthig gehabt hätten, um uns dasselbe sagen zu lassen.) フィロログス=ゴットシェットは、ルーベーン=ボードマーが非難、排斥するものは、たいていドイツでも至当な評価を受け、版元でも反古になっており、これによってドイツ人は、このような拙劣な作品を駁する何冊もの本を書くにもまさって、彼らの「洗練された趣味」を証明した、と主張する。その好例がポステル Christian Heinrich Postel (1658—1705) の未完の英雄叙事詩 *Der große Wittekind* (1724年出版) である。

『想像力について』の問題の献辞にかんしては、フィロログス=ゴットシェットはまず、「フランス人のたいへんな擁護者」であるルーベーン氏が、フランス人のしきたりである優美で簡潔な献辞を書かなかったこと、そして献辞を利用して自分の敵たちに一撃を加えるという「まことにスイス的な作法」(eine recht schweizerische Gattung der Artigkeit) をみせたことを皮肉る。そしてヴォルフ——「当代随一の哲学者」(der gröste Philosoph unserer Zeit) の果たす役割についての評価ではスイス派に同意を示しながらも、「真の文学はすぐれた哲学を基礎としなければならないこと」(daß eine wahre Beredsamkeit sich auf eine gute Philosophie gründen müsse) という真理をわれわれに明かしてくれたのは、何もルーベーン氏が最初ではない、と注記する。

さて、例の *Tadlerinnen* のⅠ部、第34篇をめぐる諸問題についても、フィロログス=ゴットシェットの駁引きは巧妙である。まず、「喜びの国」の描写を非難されながら、ルーベーン=ボードマーには何ら根拠のある釈明ができないことを指摘し、それでいてただ他人を非難するルーベーン氏は、「誰かに真実のことを言うにせよ、真実でないことを言うにせよ、まず『失礼ながら』と断わる作法を習ってはいないこと」(daß er die Ceremonie nicht gelernet habe, um Vergebung zu bitten, er mag nun jemanden [jemandem] die Wahrheit oder die Unwahrheit sagen wollen) をみずから証明した、と極言する。そして彼は、ことばの——意味内容にではなく——形式的要素にかかずらう、という非難は「一笑に付する」³。それは「この非難はまるで自分にはあたらないから」である。

次に、批判原理における無知を素朴にも告白しておきながら、後には「ひ

じょうな自惚れをもって」他人——ルーベーン氏——を評価した、という非難にたいしては、フィロログス＝ゴットシェットは、ルーベーン氏がスイスで習ったような大言壮語を、そもそも自分は祖国ドイツでは習っていない、と軽くかわす。「彼を相手に大言壮語し、夢のようなことを約束し、何びともその判定には服従しか許されない文章規則の法王を自称するよりも、むしろ私は謙遜から自分のことを控え目に語りたいのです」(Ich sage aus Bescheidenheit lieber zu wenig von mir, als daß ich mit ihm grosse Rodomontaden machen, güldene Berge versprechen und mich vor einen grammatischen Pabst ausgeben sollte, von dessen Aussprüche niemand appelliren dürfte.) われわれはここに、スイス派の壮大な詩学体系の予告にたいする若干の嫌味を読みとってよいかも知れない。

さいごに、「このような批評家が人びとの趣味を改善するであろうとか、また、真の哲学的な名文がこれらの手引き者によって樹立されるだろうとか期待するのは、まことに愚かしいことである」という酷評にかんしては、まず第一の点について、自分はあの手紙のなかで「趣味の改善」のことは何も約束していない、といささか苦しい弁明をする。そして第二の点については調子を一変して高言する——「次に、私はルーベーン氏が短い一通の手紙から文学における私の全力倆をみてとることが出来たとは思えません。[...] もし彼が文学にかんする私のいろいろの概念を知るならば、彼がアルプスの内側に住んでいる一人の人間「ルーベーン自身」にだけそうだと思ひ込んでいた以上に、それらの概念がヴォルフの哲学によく合致することが分かるでしょう」(Vors andre aber glaube ich nicht, daß der Herr Rubeen aus einem kurtzen Briefe meine gantze Stärcke in der Beredsamkeit habe einsehen können. [...] Wenn er meine Begriffe von der Beredsamkeit wüste, so würde er vielleicht finden, daß sie besser auf Hrn. Wolfs Philosophie passeten, als er sichs von einem einzigen, der disseits des Gebürges wohnt, eingebildet hätte.) ここにいう「いろいろの概念」を知るには、スイス派も、そしてわれわれも2年ののちの大著 *Critische Dichtkunst*『批判的詩論』を待たねばならない。しかしすでにこの頃ゴットシェットがその執筆にとりかかっていたことは想像にかたくない。したがってここにあるのは、スイス派の向うを張るゴットシェットの予告ともみられよう。

ゴットシェットは『想像力について』のなかにも不自然な——パロック的

な——描写をいくつか見出す。その一例は、詩人の想像力がわれわれ読者をいかに幻想の世界に移し入れるかの見本として——おそらく——ボードマーが草したもので（第2章）、先の「喜びの国」と趣きを一にしている。そこにみられる「華麗なことばの^{あや}彩」は、フィロログス=ゴットシェットにとっては「ローエンシュタインとホーフマンズヴァルダウの残滓にほかならず、当代の趣味からいえば、韻文でもほとんど——ましてや散文では許容さるべくもない」（Was sind alle diese herrliche Blümchen anders, als Lohensteinische und Hofmannswaldauische Brocken, die nach dem heutigen Geschmacke kaum in der Poesie, geschweige denn in der Prosa zu dulden sind.）要するにこれは「放逸な想像力」（eine ausschweifende Einbildungs-Krafft）の所産である。これとは対照的な、「理性に抑制された想像力」（eine vernünftig gemäßigte Einbildungs-Krafft）の所産は *Patriot* に求められる。⁵ 彼はこの道徳週誌の「見事な改訂版」⁶ がちょうど出たことを付言する。そして「よき趣味」についても、ごく最近カーニッツの詩集の付録として「あの卓越した論文」が上梓され、これによって「ドイツにおける墮落の恐れはなくなった」⁷。——ここにいう「論文」とは、この詩集を編纂したケーニヒの筆になる *Untersuchung von dem guten Geschmack in der Dicht- und Redekunst* (1727) を指す。この論文のことは先に第Ⅱ章でも、また第Ⅳ章の後注でも一言ふれたが、当時のドイツでこの論文がどれほどの意義をもつかを、われわれはゴットシェットをとおして知るわけである。⁸ さらに *Biedermann* は全体としてケーニヒに捧げられているが、その短い献辞からは、ドイツの言語と詩における趣味について、ケーニヒが一つの高い権威であったことが窺われる。

Ⅶ

Biedermann 第Ⅰ部の発行時期である1728年に出版されたスイス派のもう一つの論駁書は、全体としてみると、主要目標をハンブルクの *Der Patriot* においており、ハレ（とライプチヒ）の *Die vernünftigen Tadlerinnen* はこれに追随するものとして批判され、場合によっては——前者との比較において——むしろ肯定的に評価されることさえある。この論駁書の長いタイトル *Anklagung des verderbten Geschmackes, oder critische Anmerkungen*

über den Hamburgischen Patrioten, und die Hallischen Tadlerinnen『悪しき趣味を難ず、ハンブルクの *Der Patriot* ならびにハレの *Die Tadlerinnen* にかんする批判的所見』においても *Patriot* は先行しており、したがって、この書物全体が従来から *Antipatriot* と略称されるのには理由がある。ところでわれわれの注目をひくのは、この書物もまた「ザクセンの宮廷詩人」ケーニヒに捧げられている事実である。すなわち彼は、1728年ごろ、ゴットシェットとスイス派の双方から一つの権威とみなされ、その好意を求められていたのである——ちょうど哲学者のヴォルフがそうであったように。 *Antipatriot* の献辞では、ケーニヒは「よき趣味の偉大な擁護者」(ein grosser Verfechter des guten Geschmacks) として称揚され、やはり前記の——カーニッツ詩集(著作集)の新版に付せられた——『趣味論』から多くを期待できることが述べられている。しかしゴットシェットのへり下った献辞とは異なって、ボードマーの場合には、ケーニヒとの協力の調子が目立つ。「一般に *Spectator* のような著作の性状にかんする、またとくに *Patriot* と *Tadlerin* たちによる冊子の無秩序、無味乾燥にかんする貴下の判断が私の判断といかによく一致するかは、この問題について貴下がこれまでに賜った書簡が私に教えるところであります [...]」(Wie nahe dero Urtheil von der Natur einer *Spectatorischen* Schrift überhaupt und der Unordnung und Kaltsinnigkeit der Patriotischen und der Tadlerischen Papieren ins besondere mit dem meinigen überein komme / unterrichten mich Ihre hierüber an mich abgelassene Schreiben [...]) つまりチューリヒのボードマーたちとドレスデンのケーニヒとの間には、すでに同志的な関係があったのである。彼らは——方法は異なるにせよ——ともに「趣味の改善」(die Verbesserung des Geschmacks) をめざして戦っていた。ところでボードマーのいう「これまでの書簡」の重要な何通かは幸いにして公刊されており、そこには1720年代のケーニヒとボードマーとの関係ばかりでなく、またケーニヒとゴットシェットとの関係がきわめて興味ぶかく暗示されている。そこには——本論文の主要テーマである——「sinnreich な文体」をめぐる当時のドイツの詩人や批評家の動きの一端がうかがえるので、*Antipatriot* そのものに入るに先立って、やや詳しく目をとおしておきたい。

最初の一通は1724年3月28日付の、印刷にして20頁ちかいものである。¹この手紙からわれわれは、*Discourse* が一冊の書物としてケーニヒにも贈られ、その賛同をえたことを知る。ケーニヒはかねてから *Discourse* の寄稿

者、とくにルーベーン氏（ボードマー）に関心をいただいていた。その一因としては、ケーニヒの前任者であり、よき友人である老詩人ベッサーがなお存命しており、このベッサーはスイス派によってオーピッツ、カーニッツと共に「三人の最良のドイツ詩人」（drey von unsren besten Poeten）に数えられていたという事情がある。²これらの詩人たちと対比されるのが例のローエンシュタインとホーフマンズヴェルダウおよびその亜流である。彼らの「不自然な文体」（gezwungene Schreibart）が容易に衰える気配はなかった。³ケーニヒはボードマーに向かって、「貴下はこれまでに蔓延した悪しき趣味にたいし公然と反対を表明し、無知なる者たちによって一般に崇高な詩風と呼ばれてきた仰山な詩風の偽りを指摘する勇気をもつ最初の一人であった」（daß Sie Einer von den ersten gewesen, welcher das Herz gehabt, sich öffentlich wider den bisher eingerissenen verdorbenen Geschmack zu erklären, und die Falschheit derjenigen aufgeblasenen Dichtart zu zeigen, welche von den unverständigen insgemein die Hohe genannt worden.）と称賛する。ケーニヒはつづいて一種のドイツ詩壇展望を試みるが、そこではハンブルクのブロックスが重要である。もともとケーニヒは1710年代には数年間ハンブルクで過ごし、年長のブロックスとも親交を結んだ。1713年には最初の作品集をブロックスに捧げている。⁴また1715年には彼とともに詩社 Teutschübende Gesellschaft を創立した。さらに、ブロックスが同年イタリアのマリーノ Giambattista Marino (1569—1625) の叙事詩『ベツレヘムの幼児虐殺』を独訳（*Der bethlehemitische Kindermord*）すると、ケーニヒはこのために注と序文とマリーノの伝記を書き、みずから出版の労をとった。ところがケーニヒによれば、「この書物のなかには多くの美しさがあり、その翻訳の出来栄も悪くはなかった。しかしマリーノの悪しき趣味はその書物のいたるところを支配している。というのは、いくつかの点〔または作品〕ではブロックスはわれわれの最大の詩人に数えられるにも拘らず、不幸にも彼は、中期のイタリア詩文が——すべての識者の意見にも拘らず——いたるところでフランス人たちの今日のよき趣味よりも愛好されることを望んでいる。それで私自身がこの作品に手を加え、終日訳者ととともに検討することがしばしばあったにも拘らず、依然として私がこの作品の欠点を認めることには変りがない〔…〕」（Es sind viele Schönheiten in diesem Buche, und die Uebersetzung ist nicht übel gerathen; aber der schlimme Geschmack des Marino herrscht überall darinnen. Dann ungeacht Brocks

in gewissen Stücken einer von unsern grösten Poeten ist; so hat er doch das Unglück, daß er die italienische Poesie mittlerer Zeiten dem heutigen guten Geschmack der Franzosen, allen Kennern zu Trotz, überall vorgezogen wissen will; ungeacht ich also selbst Hand an dieses Werk gelegt, und oft ganze Tage mit dem Uebersetzer durchgegangen, so hindert mich doch dieses nicht, die Fehler desselben zu erkennen.) それに対して、ブロッケスの連作 *Irdisches Vergnügen in Gott* 『神のうちなる現世的よろこび』——ちょうど1724年に第Ⅰ部の増補版が出た——は、たいていの個所で文体がそれまでの若干の作品より「ずっと自然らしく」(viel natürlicher), とくに「教化的な内容」(der erbauliche Inhalt) と相まっではるかに優れている…。

このような冷静なブロッケス評価は翌1725年5月15日付の手紙⁶では一変する。ここではブロッケスは詩人として「誇大な文体」(schwülstige Schreib-Art) と「誤った想念」(falsche Gedancken) のゆえに排撃されると同時に、道徳的にも およそ *Der Patriot* 『愛国者』を発行するには相応わしくない人物とされる。それはブロッケスがこの年の春に、ケーニヒには何のあいさつもなく『ベツレヘムの幼児虐殺』の改版を試み、初版にあったケーニヒの序文を別人——仲間のヴァイヒマン Chr. Fr. Weichmann ——のものと取り換え、しかもケーニヒによる『マリーノ伝』だけは、「これまでこの書物が売れたのは殆んどこれあるためという理由から」(weil solches das Buch bißher fast allein verkaufft [hat]) 残しておく、という非礼をあえてしたからである。そこでケーニヒは、かねてブロッケスに批判的なボードマーとも組んで、ハンプルクの彼とその一派にたいする文筆活動を始めることを目論む。しかもその活動は最初のうち「変名で」(unter verdeckten Nahmen) 行なわれる予定である…。

ここでケーニヒの念頭にあるものは、やがて、「ボーバーフェルト協会」Boberfeldische Gesellschaft と呼ばれるものの創立計画へと発展する。この名称がオーピッツ Martin Opitz von Boberfeld にちなむことは勿論であり、寄稿者もオーピッツの同志ブフナー August Buchner とニュースラー B. W. Nüßler を筆名にするはずであった。この計画は——後出の手紙が示すとおりに——やがてケーニヒとボードマーが仲たがいのため実現をみなかったが、1725年から26年にかけてはケーニヒはこの計画にきわめて熱心であった。

その際、彼を勇気づけたのは、ブロッケス一派の文体に批判的な多くの人びとがライプチヒにもいることであつた。「[しかし] この度のライプチヒ滞在中、学識ある者はすべてこれ〔ブロッケスの仲間、トリラー Dan. Wilh. Triller の詩業〕を嘲笑していた。そして、手痛い批評でもってこれらの連中を笑い物にすることなく、勝手放題に筆をとらせている状況を慨嘆していた。そこで多くの若い人びとが眼をひらき、これら三人の英雄〔ブロッケス、ヴァイヒマン、トリラー〕の愚行と高慢と悪しき趣味を認識しはじめるにいたつた〔...〕」(〔allein〕 bey meiner itzigen Anwesenheit in Leipzig, haben sich alle Gelehrte darüber *moquirt*, und beklagt, daß man diese Leüthe so in den Tag hineinschreiben liesse, ohne durch eine derbe *Critique* sie *ridicul* zu machen. Es haben daher schon vile junge Leüthe die Augen aufgethan und angefangen, die Thorheiten, den Hochmuht und den üblen Geschmack dieser dreyen Helden zu erkennen [...]) そしてケーニヒのみたところ、この「若い人びと」のうちでも有力なのが、ちょうどその頃、*Die vernünftigen Tadlerinnen* を発行し、またケーニヒスベルクでの師ピーチュの詩集を出版した⁷学士ゴットシェットであつた。一方、ゴットシェットとしてもドレスデン宮廷で重きをなすザクセン最高の詩人——「ザクセンのモリエール」——ケーニヒの庇護を受けることは、彼の将来の活動にとって重要な意味があつた。両者の利害は一致していたと言うべきである。

もとより身分も年令もちがう両者のあいだに十分な人間関係が生まれるのは、1727年の後半になってからである。⁸しかしボードマーが *Antipatriot* を執筆して、1726年にはやくも——ブロッケスばかりでなく——ゴットシェットをも攻撃しようとしたこと、いやむしろ部分的には、ゴットシェットを攻撃するためにブロッケス自身を弁護しようとしたことにケーニヒは無関心ではおれなかつた。その年の6月15日付の手紙はケーニヒの当惑ぶりを伝えている。そもそも彼が *Antipatriot* の存在を知つたのは全くの偶然であつた。ライプチヒに住む友人で、「さる身分の高い教授」を訪れたとき、そこへ検閲のために或る書店から提出されていた原稿が目にとまつた。書店の意向で著者の名前は伏せられていたが、ケーニヒは内容と筆跡からボードマーのものであることを察知した。そしてその中でボードマーが、さきにゴットシェットの *Tadlerinnen* ——「この不遜なおしゃべり女たち」(diese anmassende Plauderinnen) ——によって「フェーブスとガリマティアス」

(Phebus und Galimathias) ときめつけられた例の個所 (*Discourse II*, 1 の「喜びの国」) を弁明するために、ブロッケスの実例を援用していること、それどころか、あの <erbärmlich schön> —— ブロッケスが「そのために故郷の町〔ハンプルク〕でさえ、すでに当時、すべての理性的な人びと、よき趣味をもつ識者たちのあいだで笑い物になった」(wodurch er sich bey allen vernünfftigen Leüthen und Kennern des guten Geschmacks, selbst in seiner Vater-Stadt schon dazumahl *ridicul* gemacht [hat]) あの <erbärmlich schön> を弁護しようとしているのを発見した。その理由というのも、ただ「Tadlerin たちがこの言回しのことでブロッケスを嘲笑したから」(weil Ihn [Brockes] die Tadlerinnen deßwegen ausgelacht [haben]) にすぎない。

ケーニヒは詩人ブロッケスと「彼の盲目的な崇拜者たち」(seine blinden Anbeter) との本質的な相違をよく知っている。しかしブロッケスにしばしばみられる誇張、放恣な趣味を許すわけにはゆかない。最近の *Irdisches Vergnügen in Gott* のなかでも彼ブロッケスは <gräßlich schön> といった言回し⁹をして恥じるところがない。このような「誤った趣味という暴君を攻撃し、いつかはドイツからすっかり追放すること」(diesen Tyrannen, ich meine den falschen Geschmack, zu bekriegen, und endlich einmahl ganz aus Teütschland zu verjagen) を主要な目的とする「ボーバーフェルト協会」のメンバーたるべきボードマーが、「このようなグロテスクな表現」(solche *grotesque* Ausdrückung) を——理性に抗して (der Vernunft zu Trotz) ——支持しようとするのは、ケーニヒ(やその友人たち) の理解に苦しむところである。ケーニヒはそのような行為が「ボーバーフェルト協会にたいし、まだ生まれる前に、みずからの手で致命的な一撃を与える」(der Boberfeldischen Gesellschaft, noch vor der Geburt, schon einen tödlichen Stoß mit eigener Hand beybringen) ことになるのを恐れる。

ケーニヒによれば、このような点にかんしては、ゴットシェットの *Tadlerinnen* はむしろ称賛されなければならない。*Tadlerinnen* から加えられた「フェーブスとガリマティアス」の酷評に応えるには、ブロッケスを援用するのではなく、ゴットシェットにあっては「フェーブスとガリマティアス」の本質規定がはっきりしないことを指摘するのが得策であろう、と彼はボードマーに助言する。ケーニヒは、そうすることによって、問題にされた一連の言回しがむしろ修辞学と詩学で根拠づけられた美しい、技巧的な詞姿

(Figuren) とみなされる可能性を暗示するわけである。いずれにせよ、弁明するには、「黄金時代のラテン詩人、すぐれた外国人、そして最後にオーピッツ、カーニッツ、ベッサー [...] といった健全な趣味をもつわれわれ自身の詩人からの実例による」(mit Exempeln aus den Lateinischen Dichtern des güldnen *seculi*, aus guten Fremden, und endlich aus unsern eigenen Poeten von gesundem Geschmack, als Opitzen, Canitz, Besern [...]) べきであって、「悪しき誇張趣味のパトロンの実例による」(mit dem Beyspiele eines Patrons des üblen schwülstigen Geschmacks) べきではない。「さもなければ、ローエンシュタイン、ブロッケス、アントール、および彼らの追従者たちの放恣な言回しをすべて弁護することは、きわめて容易な仕事になるだろう」(sonst es sehr leicht wäre, alle ausschweifende Red-Arten aus Lohenstein, Brocks, Amthorn und ihren Folgern zu beschützen.)

当時のケーニヒがゴットシェットのなかに有力な味方を期待したことは確かと思われる。しかし、一足はやくブロッケス批判を実行に移したボードマーを傘下におくことは、おそらくケーニヒにとって一層切実な問題であったであろう。したがってボードマーに向かつては、ゴットシェットを不当に低く評価してみせたような節がある。さきに *Die vernünftigen Tadlerinnen* を「おしゃべり女たち」と呼んだのはその一例であるが、その前の1725年5月15日の手紙でも、この雑誌が——*Patriot* と同様に——ひろく読まれているのは、ひとえに「純正、流暢なドイツ語」(ein reines und wohl-fliessendes Teütsch) のせいであって、内容が新鮮、奇抜であるからではない、と力説する。一方、ボードマーたちの *Discourse* は内容において優りながら、そのスイス方言のためにドイツではひろく流布することがない。そこでケーニヒは、ボードマーの著作がドイツでも出版されるために、事前に閲読して文章をなおす労をとろうとする。それから2年あまり——すでに引用した1726年6月15日の手紙からは1年あまりたった1727年9月1日、ケーニヒは同じ趣旨のことをもう一度くり返す。この時点では、その1年あまりの間のケーニヒの筆不精が原因となって、すでにボードマーの側にいくつかの深刻な「誤解」が生じていた。その一つは、ケーニヒがゴットシェットと親密な関係になり、*Tadlerinnen* や *Biedermann* に寄稿している、という風評にもとづくものであった。ケーニヒは躍起となってボードマーの「邪推」を打ち消す。「*Die Tadlerinnen* への盲目的な愛というのも

同様にまったく根も葉もないことです。おお、このおしゃべり女たちの肩をもつ理由がどこにあるというのです。これまでに私は、純正なドイツ語のほかにはこの書物になんの取り柄もない、と書かなかったでしょうか。これまでに貴下は私もその著者の一人であるように聞いた、と言^うて来られたことがあります、神明に誓って私は、生涯一字たりともそれに寄稿したことはありません。ほんとうの著者はただ一人、ゴットシェット学士ですが、これは私に頼って立身出世しようとする人間です。こんな若者に私がどんな配慮をしてやる必要があるというのです。私は彼の *Tadlerinnen* のことで私の立場をもう十分に説明しておきました。それで彼は、私が *Tadlerinnen* にも、そして彼が目下のところ書いている *Biedermann* にも盲目的な愛をいだいていないことは、彼がいちばんよく知っています。もしこの小包が大きくなりすぎることを心配しなくてよいなら、ここにある彼自身の手紙でこのことを証明もできるでしょうが「...」(Die blinde Liebe zu den *Tadlerinnen* ist eben so wenig gegründet, Mein Gott, was sollte mich anreizen, dieser Plauderinnen *Partie* zu nehmen. Habe ich Ihnen nicht selbst geschrieben, daß ausser dem reinen Teütschen nichts daran? Ich kan mit Gott betheüren, daß ich in diese Schrifften, Zeit Lebens, keinen Buchstaben hergegeben, wie Sie mir auch, vorher schon, einmah! gemeldet, daß Sie gehört, ich wäre ein *autor* mit davon. Der einzige rechte *autor* ist *Magister* Gottsched, ein Mensch, der sein ganzes Glück durch mich zu machen sucht, was hätte ich dann für *menagement* für einen solchen jungen Menschen nöthig? Ich habe ihm wegen seiner *Tadlerinnen* schon genug Bescheid gegeben, und er weiß es am besten, daß ich weder zu denselben, noch zu seinem *Biedermann*, den er itzo schreibt, eine blinde Liebe hege, ich könnte es mit seinen eigenen Briefen hier auch erweisen, wenn ich nicht befürchten müste, das *paquet* würde zu groß.) われわれはケーニヒが言及するゴットシェットの何通かの手紙を参照することはできない。しかしダンツェルが編纂した『書簡集』¹⁰からは、同じ1727年の中頃から、然るべき仲介者の努力で、すでにゴットシェットとケーニヒの関係は急速に進展したことが察せられる。したがってゴットシェットにたいする上記1729年9月1日の酷評はそのまま受け取られてはならない。むしろ離反の態度をみせるボードマーを引きとめようとするケーニヒの苦心をそこに読み取るべきであろう。同じ手紙のなかで、

Antipatriot の出版を引き受けてくれる書店を探す苦勞をこまごまと録しているのも、ボードマーをつなぎとめる意図のあらわれとみることが出来る。それはともかくとして、ケーニヒは *Die vernünftigen Tadlerinnen* に冷淡な態度をみせながらも、ブロッケスの *Der Patriot* よりはこちらをとることを明言する。それは *Tadlerinnen* があの <erbärmlich schön> を正しく批判しているからである。「私のこの意見は変わることはありません。そして然るべき時に——もし私が存命しているなら——きっと根拠をもってこのことを主張するでしょう」 ([Aber] ich werde dieser Meynung allemahl bleiben, und schon zu seiner Zeit, wenn ich lebe, mit Gründen behaupten.) 「(erbärmlich schön というような) 気取った、不自然な言回しを彼ブロッケスについて弁護することは、よき趣味を助長するという共通の目的に反すると思われる」 ([aber] ich finde wieder unsren Zweck, dem guten Geschmack aufzuhelfen, daß man eine affectirte und unnatürliche Redens-Art, (wie erbärmlich-schön,) an ihm vertheidige.) からである。

それから2ヶ月ほどたった1727年10月30日付の——比較的短い——手紙によると、けっきょく「誤解」は完全には解けず、またライプチヒでの出版の見通しがなくなったということで、*Antipatriot* の原稿は——検閲官による若干の加筆をのこしたまま——チューリヒへと返送された。そして、スイス派がさきの『想像力について』(第8章)のなかで、練兵の場面の描写についてケーニヒとピーチュを比較し、前者を「冗長」であるとしたことにたいして、ケーニヒは不満の色をかくそうとはしない。彼はピーチュの問題の個所をこまかく吟味してみた。しかし「このような個所については、意見を口で述べるのと同じくらい明確に筆で述べることは不可能なので、私はこのような批評をなかなか文章にすることができません。そうでなければ、例の erbärmlich-schön について、もう今までに私見を文章にしていることでしょう。しかし暇をみつけ次第、私はこれにとりかかるつもりです」 (Ich komme sehr schwer daran, dergleichen Criticken aufzusetzen, weil man sich unmöglich so deutlich mit der Feder als mündlich über dergleichen *passagen* ausdrücken kan. Sonst würde ich schon meine Meynung wegen des Erbärmlich-schön aufgesetzt haben, darüber ich mich doch, so bald ich Zeit gewinne, zumachen gedenke.) おそらくケーニヒはその機会を前記の『趣味論』(1727)の——予定されていた——続篇に見出すことができ

たかも知れない。しかし『趣味論』は原理篇にあたる第1部だけで終わった。ゴットシェットの場合と同じく、その「不合理さ」についての詳細な説明はけっきょく無いままである。それはともかく、ブロッケスがそのオラトリウムではじめて使用した <erbärmlich schön> という矛盾表現法 (oxymoron) が、当時どれほどの波瀾を呼んだかは、以上の叙述からも明らかであろう。¹¹

ところで、やがてチューリヒで¹²——著者名のないまま——出版された *Antipatriot* には、<erbärmlich schön> にかんする問題の個所が見当らない。われわれはその間の事情を知ることはできないが、もしボードマーがケーニヒへの配慮からこれを削除したとすれば、ケーニヒは自分のくわしい意見を述べなかったばかりか、ボードマーのそれをも抹殺する働きをしたわけである。

VIII

三人三様のケーニヒ、ボードマー、ゴットシェットが1720年代に織りなす人間模様は、それとして一つの興味ぶかい観察対象である。ことに中心となる宮廷詩人ケーニヒの人間像は類型としても注目に値しよう。しかしここで *Antipatriot* そのものの考察に移ろう。その場合に、以上のような史的背景は、さきのケーニヒへの献辞についてばかりでなく、本文の多くの点でもわれわれの理解を助けてくれる。本文の構成はAからEまでの5章からなっているが、Aではその頃までのイギリスとドイツ（およびスイス）における道徳週誌を概観し、Bでは *Patriot* と *Tadlerinnen* にみられる、道徳週誌としての性格の無統一、寄稿者の個性の稀薄さを批判し、Cでは <das Sinnreiche> と <das Scharfsinnige> とにもとづく <Witz> を構成原理とする文体を論じ、Dでは問題の二つの道徳週誌が試みる個人・団体・民族の性格描写を批判し、Eでは詩的ジャンルとしての寓意 (Allegorie)、寓話 (Fabel)、夢と幻視 (Gesicht) を規定したうえで、*Patriot* と *Tadlerinnen* にみられる実例の不自然さ、不合理さを指摘する。われわれにとくに関係のあるのは Von dem Sinnreichen und Scharffsinnigen と題するC章であり、これはまた本書の中心をなすとともに、スイス派の文芸論一般という観点からも重要である。¹

さきにケーニヒはボードマーにたいし、ゴットシェットからの「フェーブスとガリマティアス」についての非難に応えるには、まずゴットシェット自身これらの明確な概念をもっていないことを指摘するのがよい、と助言した。これに従うかのように、*Antipatriot* では、ボードマーは〈sinnreich〉にかんするゴットシェットの概念そのものの曖昧さを指摘し、批評家としてのゴットシェットの資格一般を問題にする。すなわち、批評原理の薄弱な批評家という烙印をゴットシェットに押そうというわけである。この方法は『想像力について』の献辞にも暗示されていた。

ボードマーはまずC章の冒頭で「ドイツの偉大な教師」(der grasse Lehrer Teutschlands) ヴォルフにおける「言語の純正」(die Reinigkeit der Sprache), 「概念の明確」(die Deutlichkeit der Begriffe), 「証明の徹底」(die Gründlichkeit der Beweise), 「個々の真理の整然たる結合」(die ordentliche Verknüpfung der Wahrheiten) を称揚し、とくに彼の主著 *Die vernünftigen Gedancken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen* 『神・世界・人間の靈魂についての理性的考察』(いわゆる『ドイツ形而上学』)(1720)² のなかに〈Witz〉について明快な記述があり、ここに〈sinnreich〉への正しい手がかりが得られることを指摘する。

以下ボードマーが引用するのは、同書第3章 Von der Seele überhaupt, was wir nemlich von ihr wahrnehmen (§§ 191—539) からの§ 366³, 第5章 Von dem Wesen der Seele und eines Geistes überhaupt (§§ 729—927) からの§ 850⁴と§§ 858—860⁵, およびヴォルフ自身が同書への注解として執筆した続篇 *Anmerckungen* (1724)⁶ からの§ 320である。これらのパラグラフに関連のある若干の他のパラグラフをも参照して、ここでボードマーの言おうとすることを要約すると次のようになろう。——「〔事物と事物の〕類似性を容易に知覚することへの素質をもつ者は sinnreich と呼ばれる」 (§ 366)。一方, 「〔事物と事物の〕類似性を容易に知覚する能力」は〈Witz〉(当時のフランス語では esprit, 英語では wit) として把握される (§§ 366, 858)。すなわち——形容詞にすれば——〈witzig〉は〈sinnreich〉と同義といって差支えない。ところで二つの事物のあいだの類似性を知覚するには、それぞれの事物について判明な概念をもつことが前提となる。そのような者が一つの事物についてのもつ表象も判明であり、したがってその表象のなかに他の人よりも多くのものを見出し、また他の人が気付かぬような秘められたものを発見する。このような者は〈scharfsinnig〉で

ある (§§ 850, 858)。本来、悟性 (Verstand) とは表象能力にほかならないから、〈Scharfsinnigkeit〉は——直観的認識についても、また符牒的認識についても——悟性の第一の完全性である (§ 850)。ところで問題の二つの事物は、われわれの目の前に現存する事物ばかりとは限らない。かつて知覚されたことのある事物といま知覚されている事物のあいだの類似性も問題になりうる。ヴォルフによれば、「現存しない事物の表象はふつう想像 (Einbildungen) と呼ばれ、そしてこのような表象を生みだす精神能力は想像力 (Einbildungskraft) と呼ばれる」 (§ 235)⁸。このような想像力が、以前に知覚したものと類似の事物をわれわれが知覚する場合に働きやすいことは言うまでもない。この意味で想像力是一種の連想力とみることもできる。ところでヴォルフの心理学では、われわれが以前にもったことのある想念がふたたび現われた場合、「その想念をわれわれがこれまでに持ったことがある」と認識する能力は記憶 (Gedächtnis) と呼ばれる (§ 249)⁹。したがって「〈Witz〉は〈Scharfsinnigkeit〉と〈よき想像力〉と〈記憶〉とから成立する」 (§ 858)。——こうしてヴォルフにあっては〈Witz〉は〈Scharfsinnigkeit〉、〈想像力〉、〈記憶〉という互いに密接不離の関係にある三つの精神能力を包括する一つの精神能力である。この〈Witz〉が創案 (Erfindung, inventio) を生命とする弁論家と詩人にいかに有用であるかをヴォルフはわざわざ注意している (Anmerckungen § 320)¹⁰。

しかしボードマーによれば、文章における「sinnreich なもの」を考究するにあたって、ドイツの著作家は——なぜかしら——このように精確、明快なヴォルフの〈Witz〉論を活用しようとはしないで、「むしろ自分たちの混乱した頭」に従おうとする¹¹。その一人がゴットシェットにほかならない。ここから——われわれが先に紹介した——*Die vernünftigen Tadlerinnen* 1部、第37篇の詳細な吟味がはじまる。

たしかにわれわれがみたとおり、これまでのゴットシェットには「sinnreich なもの」を原理的に扱うという態度が欠けている。そこで、たとえば、「sinnreich という語そのものが、すでに、そのような表現が〈Witz〉に満ち、想念に富んでいなければならないことを暗示する云々」(前出 p.16) という説明の曖昧さ、むしろ無意味さをボードマーが指摘するのは当然であろう。なぜなら、ヴォルフの定義からいって、「〈Witz〉に満ちていること」が即ち〈sinnreich〉なのであるから。つまりゴットシェットの説明は一種の循環論法にすぎない¹²。要するに〈Witz〉の概念の

不明確さに起因することである。まだ＜金^{かね}＞の概念がはっきりしない者にむかって＜金持ち＞とは何かを説明するのと同じくらい滑稽だ、とボードマーはきめつける。しかしボードマーの *Tadlerinnen* 批判は細部においてどの程度までわれわれを納得させるだろうか？

まずボードマーは以上のことから、「別々の事物のあいだに存在する或る種の類似性をわれわれに露わにするものは、すべて＜sinnreich＞と呼ばれる——これらの類似性が真の根拠をもっていて、事柄の性質上、本質的であるか、或いは、たんなる外見にもとづいているかの区別はなく〔…〕」(Man nennet alles Sinnreich / was uns gewisse Aehnlichkeiten zwischen unterschiedenen Dingen entdeckt; Es seye / daß diese Aehnlichkeiten ihren wahren Grund haben und in der Natur der Sachen wesentlich seyen / oder daß sie auf einem blossen Schein beruhen〔…〕)と結論する。しかし彼はすぐに、＜scharfsinnig＞と＜sinnreich＞の境界が曖昧であることを告白せざるをえない。彼によれば、これについては学者たちの意見は一致しておらず、また、それとして十分には論究されていない。この問題をもっとも深く掘り下げた *Spectator* でも、彼を十分に納得させることはできない。¹³ 彼がもっぱら頼るのはヴォルフによる上記の説明 (§ 850) である。そしてこれを基礎にして、「文章における scharfsinnig なもの」の一般性格として、1) 秘められた類似性が適度のものであること（すなわち、すぐ誰の目にもつくほど近いものも、また逆に、長いあいだ考えなければならぬほど遠いものも不可）、2) それが事物の本性にもとづくこと（すなわち、たんなる＜Wortspiel＞や＜Anagramm＞などは不可）、3) 秘められた類似性をいくつも露わにするものが高度に＜scharfsinnig＞であること——の三つを挙げる。そして更に4)「これによって＜scharfsinnig＞なものは、偉大で、明確で、われわれを楽しませるような概念を呼び起こさずにはいない」(Folglich muß das Scharffsinnige uns grosse deutliche und ergötzende Begriffe erwecken.) ボードマーは、これらの「基本規則」(Grund-Regeln)から「文章において scharfsinnig と呼ばれるもの」が何であるかを誰でも理解できるとし、さらにフュリス＝ゴットシェットが＜sinnreich＞として扱おうとしたものは、正しくは＜scharfsinnig＞と呼ばれるべきである、と主張する。この用語の混乱ぶりから「彼女〔フュリス〕のもつ概念の明確さ、また彼女がいちばん自慢する、ドイツ語における知識がどのようなものか見当がつく」。¹⁴ — しかしわれ

われにとって、このあたりの論理はかならずしも明快ではない。要するにボードマーとしては、ゴットシェットがまず「よき文体一般」を規定して、次に「とくに sinnreich な文体」の吟味に移りながら、羅列された実例に共通するもの——「sinnreich な文体」を成立せしめる原理的なものを的確に捉えようとはしないことが不満なのである。（ただしボードマーによれば、カーニッツの諷刺詩の一節が説くところのものは、「自然らしく書くこと」——すなわち、対象、対象についての概念、言語によるその表現の相即性であり、したがって、さきにゴットシェットがこの一節から引き出した、「よき文体一般」にかんする三つの規則 1), 2), 3) のうち、2) と 3) は 1) に包括されていて余分である。¹⁵）「sinnreich な文体」を成立せしめる条件は、ボードマーにとっては、「たんなる理性的な命題から成り立つのではなくて、そこに類似の事物の比較が現われること」¹⁶である。しかしこれに続く議論では、ボードマーはこの条件をそのまま「scharfsinnig な文体」の条件にしようとする。彼がなぜ本来は「sinnreich なもの」に包含さるべき「scharfsinnig なもの」を——場合によっては——独立させようとするのか、われわれの理解に苦しむところである。いずれにせよ、詩人ベッサーの二例について、その一つ——「良風美俗の都市ライプチヒ」を「ミューズ神と優美神たちの母にして乳母」と呼んだものは、「類似性と比喻の力強さとの故に」(wegen der Aehnlichkeit und Krafft der Sinn-Bilder) <sinnreich> であるが、他の一つ——よき娘を珍しい宝石にたとえ、また国家・社会を一人の娘にたとえた個所は、「比較における類似性があまりに遠く離れているので」(weil die Aehnlichkeiten in der Vergleichen allzuweit entfernt [sind]), <sinnreich> ではあるが <scharfsinnig> ¹⁷ではない、といった説明を読むとき、われわれは首をかしげざるをえない。

これ以外の実例についてのボードマーの批評をこまかく紹介することは省略しよう。そこには示唆にとんだ説明も少なくない。たとえば、暴君の死にかんするカーニッツの叙述は、「事物の類似性が現われないために」(weil darinne keine Aehnlichkeiten der Dingen vorkommen), 「scharfsinnig な文体」というよりは、むしろ「力強く、印象ぶかい文体」(eine starcke und nachdrückliche Schreib-Art) として評価する。しかしその一方で、死が王宮をも牧人小屋をもひとしく訪れる、という例について、その内容は「すべての人間は死なねばならぬ」というのではなく、「貴顕の士といえども、死にたいしては、卑賤の者と同様に身を守るすべはない——死はいかなる人間

も容赦しない」というのだ、と主張するくだりなどは、ただ異を立てるための議論というべきであろう。¹⁸ 批評原理をもたぬことを告白しながら他人をきびしく批評するゴットシェットをたたくことに、スイス派はきわめて熱心である。『想像力について』の献辞に引用された *Die vernünftigen Tadlerinnen* のⅠ部、第34篇の例の個所がここでもそのまま反覆される。

Antipatriot のC章には、「sinnreich な文体」を代表するものとして、さらに「比喩的な文体について」(Von der verblühten Schreib-Art) と題する10頁ばかりの記述がある。その冒頭には比喩の使用目的として、1) 類似性をもつ他の概念との比較によって、問題とされる概念をいっそう明確にすること、2) 類似の事物のゆたかな形象を含むことによって、表現に特別な力強さを賦与すること、3) 事物の秘められた類似性の発見によって人間の精神をよろこばせること——の三つが挙げられる。¹⁹ これが *Tadlerinnen* のⅠ部、第37篇でゴットシェットが挙げた三つの通則(前出 p.17)を意識してのことかどうかは断定のかぎりでないが、ここでも事物の類似性に力点がおかれていることは注目に値する。しかしこれにつづいてボードマー——ルーベーン氏による——「喜びの国」のために試みる一連の弁明は、典拠にかんする彼の博学ぶりを証明しても、事柄自体の正当性の証明にはなりにくい。 „Lasse deine Augen über dises lustige Land hin spatzieren!“ の自然らしさを主張するために、フランス語の promener ses yeux (見回す) という隠喩的表現を援用するのでは、相手に新しい攻撃の材料を与えるばかりであろう。事実フィロログス=ゴットシェットは *Der Biedermann* の第75篇(1728年10月11日)で勝ち誇って叫ぶ——「彼は思いつくままのことを——ドイツ語を使いながら——フランス語とラテン語でしゃべるのだ。そしてそれによってわれわれの母国語をまったく粗野、不可解、野蛮にするのだ」(Er redet im Deutschen französisch und lateinisch, wie es ihm in den Sinn kommt, und macht dadurch unsre Muttersprache ganz rauhe, unverständlich und barbarisch.) そして「これら二つの書物〔*Patriot* と *Tadlerinnen*〕の著者たちは、文体のもっとも普通の規則さえ心得ず、ドイツ人の耳には耐えがたいバルバリスモスやソロイキスモスをいくつか犯すことなくして、ものの三行も書くことができないような敵に攻撃されたことを一つの名誉と考えなければならない」(Die Verfasser dieser beyden Schrifften haben sichs vor eine Ehre zu halten, daß sie von einem solchen Feinde angegriffen worden, der die gemeinsten Regeln der Schreibart

nicht weiß, und nicht drey Zeilen schreiben kan, ohne etliche Barbarismos und Solöicismos zu begehen, die in Deutschen Ohren unerträglich sind.) とさえ極言する。ゴットシェットの切り札は、やはり、相手のことばの弱点を衝くことであった。

× × × × ×

Die vernünftigen Tadlerinnen Ⅰ部、第34篇に端を発したゴットシェットとスイス派との、「sinnreich なもの」をめぐる論争はひとまずここで終わる。この論争の歴史的な意味は、けっきょく1720年代というドイツ文学史の一つの重大な転換期もしくは移行期に、新しい詩的言語がどのように摸索されたかを具体的に示している点にあるといえよう。²⁰ この詩的言語の問題が1730年代にゴットシェットとスイス派においてどのように展開したか、また、1730年代に両者の関係は一般にどうであったか²¹——それは本論文のテーマではない。しかし1720年代の論争の余韻は双方それぞれの主著である *Critische Dichtkunst* 『批判的詩論』にも認められる。すなわち、ブライティンガーによる *Critische Dichtkunst* (1740) のⅡ部、第7章(Von der Schreibart insgemein)では、例の「喜びの国」で問題となった一連の言回しが列挙され、そしてこれらをめぐるゴットシェットとの論争が——ごく簡単にではあるが——回顧されている。われわれはそこで、ゴットシェットが彼の *Critische Dichtkunst* の或る個所で、これらの言回しを、「フランス語のできない人間には理解できないような、ドイツ語におけるバルバリスモス」(Barbarismi in unsrer Mundart, die kein Mensch versteht, der nicht Französisch kan) として更に攻撃したことを知らされる。おそらくそれは初版(1730)のⅠ部、第8章(Von verblühten Redensarten)においてではなかったかと推定される。²² いまスイス派(ブライティンガー)は、これらの言回しを「新しい」隠喩法として更に弁護しようとする。しかしその口調には1720年代のような激しさは感じられない。すでに彼らは想像力を基本原理とする独自の文芸論を完成していたのである。

一方、ゴットシェットのほうも *Critische Dichtkunst* で——創案力(Erfindungskraft)としての——〈Witz〉を基本原理とする彼自身の文芸論を樹立していた。詩の世界を——現実の世界に対する——「可能な世界」(eine mögliche Welt) として把握するのに、スイス派は想像力を、ゴット

シェットは〈Witz〉を基本原理としたのである。しかも想像力と〈Witz〉がヴォルフ哲学を共通の源泉にすることは、本論文でもみたとおりである。ことにゴットシェットは哲学者として最初からスイス派以上にヴォルフとは深い関係にあった。その彼が1720年代の中頃にはスイス派から、文芸の問題における〈Witz〉の意義を教えられるのである。それではスイス派がそれ以後〈Witz〉にはほとんど関心をみせず、もっぱら想像力の機能の発展に力をそそいだのは何故か？——これが「1720年代のゴットシェットとスイス派」²³が提起する問題の一つである。

このような大きな問題に答えるのは別の機会にゆずり、さいごに後日譚をもう一つつけ加えておこう。それは *Die vernünftigen Tadelrinnen* の第3版（1748）では、I部の第34篇はすっかり別の内容のもので置き換えられていることである。しかし、それがどういう事情によるものか、またその事情を究明することに意味があるのかどうか、それは本論文の筆者には目下のところ分らない。

注 解

I (pp. 1 - 4)

- 1 詳細な評伝として Eugen Wolf: *Gottscheds Stellung im deutschen Bildungsleben*, 2 Bde. Kiel u. Leipzig 1895 - 97. — Gustav Waniek: *Gottsched und die deutsche Litteratur seiner Zeit*, Leipzig 1897. — Eugen Reichel: *Gottsched*, 2 Bde. Berlin 1908 - 12. ——とくにケーニヒスベルク時代については, Johannes Reicke: *Zu J. C. Gottsched's Lehrjahren auf der Königsberger Universität*, Diss. Königsberg 1892. —— Gottsched 自身による回想録としては, 哲学的な主著 *Erste Gründe der gesamten Weltweisheit. Praktischer Theil* の第6版（1756）に初めて付せられた約60頁の序文。——なお1974年出版予定の Marilyn K. Torbruegge による評伝 (Slg. Metzler M 125) は参照できなかった。
- 2 悲歌 *Als er aus seinem Vaterlande gieng. Im Jenner des 1724sten Jahres.* (*Ausgew. Werke*, hrsg. v. J. Birke, 1. Bd. 1968, S. 371 ff.) 参照。
- 3 Werner Rieck: *J. C. Gottsched. Eine kritische Würdigung seines Werkes*, Berlin 1972. 序文も跋もないが, 集団研究のように見受けられる。
- 4 *Vermischte Gedichte* (1710). それに付せられた, 三人の詩人による *Unterredung von der Deutschen Poesie* は当時のドイツ詩壇をうかがわせる興味ぶかい記録である。

- 5 のちに機関誌として *Beyträge zur Critischen Historie der Deutschen Sprache, Poesie und Beredsamkeit*, 8 Bde. 1712-44 (Nachdruck 1970).
- 6 ただし, Wolff を祖述した Philipp Thümmig: *Institutiones Philosophiae Wolfianae*, 2 Bde. 1725-26 を教材とした。Thümmig の著書と, Gottsched 自身が Wolff 哲学のハンドブックとして著わした *Weltweisheit* (1733-34) との関係は, E. Wolf, 1. Bd. 144 ff. にくわしい。
- 7 ドイツにおける「道徳週誌」の総合的研究として, 近年 Wolfgang Martens: *Die Botschaft der Tugend. Die Aufklärung im Spiegel der deutschen Moralischen Wochenschriften*, Stuttgart 1968 の労作が出た。巻末の詳細な文献表はきわめて有益である。
- 8 前出の注1参照。
- 9 W. Martens の校訂で初版が復刻された—— 3 Textbände, Berlin 1969-70, Kommentarband は未刊。
- 10 本論文の筆者は, ゲッティンゲン大学付属図書館ならびにミュンヘン在のバイエルン国立図書館所蔵の「初版」を複写によって利用することができた。両者は版元が同じではなく, 正字法も僅かながら異なっている。本章の注11の Blackall 410 (注48) に従うと前者がオリジナルに相当するので, 本論文での引用は前者によった。再版と三版はハンブルク大学付属図書館所蔵のものを参照することができた。—— E. Reichel 編の *Gesammelte Schriften*, 6 Bde. Berlin 1903 ff. の最初の2巻には三版の全104篇のうち63篇が収められているが, 正字法は現代化されている。本論文の筆者は関西外国語大学付属図書館の好意によりこの『著作集』を参照することができた。ただし, 本論文で問題となる1部の第34, 37篇は収録されていない。(第34篇は——本論文の結びで述べるとおり——三版では別の内容のもので置き換えられている。)
- 11 この論争のごく簡単な筋書きが, Eric A. Blackall: *Die Entwicklung des Deutschen zur Literatursprache 1700-1775*, Stuttgart 1966, 72 ff. にみられる。

II (pp. 4-11)

- 1 <Beredsamkeit> もしくは <Wohlredenheit> は狭義には「雄弁」「弁論」であり, <Poesie> もしくは <Poeterey> つまり「詩作」に並列した。しかし両者の区別が明確ではない場合も多い。これはスイス派についても同様である。たとえば——後出の—— *Von dem Einfluß und Gebrauche der Einbildungs-Krafft* における Wolff への献辞など参照。ここでは広義として「文学」と訳しておく。以下, 本論文ではこの訳語をあてることが多い。
- 2 参考文献として H. v. Stein (*Die Entstehung der neueren Ästhetik*, 1886),

- A. Baeumler (*Kants Kritik der Urteilskraft* I, 1923), E. Cassirer (*Die Philosophie der Aufklärung*, 1932) など。
- 3 テキストは „Deutsche Literatur in Entwicklungsreihen“ Reihe: Barockdrama 6 (Hrsg. v. W. Flemming) に所収。なお Goedeke をはじめ多くの文献でタイトルが *Der für die Sünden...* とあるのは誤りで、初版その他によっても *Der für die Sünde...* が正しい (ハンブルク大学付属図書館の教示による)。
 - 4 Brockes の文体については、さしあたり Blackall 181–193 を参照。なお後出の注Ⅶ 9 および11 をも参照。
 - 5 おそらく Pietsch ではないかと推測される。1725 年に Gottsched はその詩集をライプチヒで出版した。後出の注Ⅶ 7 参照。
 - 6 おそらく David Faßmann の雑誌 *Gespräche im Reiche der Toten* (1716–40) のことであろう。なおジャンルとしての「死者の対話」には、すでにフランスに Fontenelle (1686), Fénelon (1700–18) のモデルがあった。Martens 75 参照。
 - 7 その一つは *An Melinde, auf ihren Namenstag*. „Auf! schönste, tauche dich in Milch und Rosen-Blut, / Laß deinen Mund-Rubin erfrischte Strahlen fangen...“ 原詩は Neukirch 編 *Herrn von Hofmannswaldau und anderer Deutschen ... Gedichte*. „Neudrucke“ N. F. 1, 1. Bd. (1961), 102 ff. のほかに, DNL 39, 484 ff. にも所収。Neukirch 自身, 後期バロックから啓蒙時代への移行を身をもって現わす詩人であった。—— *Discourse* での批評はⅣ部, 第17篇にみられる。

Ⅲ (pp. 12–14)

- 1 テキストは1969年に複製された。第Ⅰ部のみ以前から Theodor Vetter により翻刻 (Zürich 1891)。Ⅱ部の第1篇は DNL 42 にも所収。
- 2 E. R. Curtius: *Europäische Literatur und lateinisches Mittelalter*. Bern 1954, Kap. 10 Die Ideallandschaft 参照。なおこの篇のモットーには Horatius の *Carmina* Ⅲ, 4 の第2節 (... an me ludit amabilis / Insania? Audire et videor pios / Errare per lucos, amoenae / Quos et aquae subeunt et aerae.) が選ばれている。
- 3 „so weiß ich nicht was ich von dem Luchsaugigten Verfolger unnatürlicher Gedancken und Ausdrückungen dencken soll?“ (S. 272)
- 4 „[ich] wolte nichts wünschen, als daß Ihr wehrteste Tadlerinnen den scharffsichtigen Herrn Rubeen zu einer Vertheidigung seiner Redens-Arten bringen köntet; denn ich bin gewiß, daß seine Entschuldigung zugleich alle von ihm getadelte Poeten rechtfertigen würden.“ (S. 272)

N (pp. 14–19)

- 1 17世紀後半に Boileau を手本に詩作したベルリンの政治家・外交官 Canitz 男爵の作品集には、Joh. U. König の編纂した標準版(1727)以前に多数の——程度の差はあれ——不完全な版が存在した。Gottsched がモットーに使ったのは *Die dritte Satyre, Von der Poesie* からの 133 行以下であるが、引用テキストの最後の 2 行は、König 版では、

Und eines Zwerges Bild die Artigkeit verliert,

Wenn er wird in Gestalt des Riesen aufgeführt.

となっている。König がみせた編纂技術は画期的なものであったが、彼が自分の趣味に従って改変した個所が少なくない。(当時それは「編纂者」の仕事の一部とみなされていた。) 問題の諷刺詩は König 版以前の稿態で DNL 39, 404 ff. にも収録されているが、Gottsched が引用する 8 行については、König 版のもの——正字法、句読点を除けば——差異はない。Gottsched が使用した版を確かめることはできないが、或は引用にあたって彼自身が手を加えたことも想像される。本論文のⅧ章(注15)でも触れるとおり、冒頭の *Man redt...* は、元来 *Man denckt...* とあったものを Gottsched が意図的に改変したとされている。——なお König 版には詳細な Canitz の伝記のほかに、本論文でも言及される約 100 頁の『趣味論』(*Untersuchung von dem guten Geschmack in der Dicht- und Rede-Kunst*) が付属している。またこの König 版は組版の美しさ、挿入された銅版画の精巧さなど、高い美的価値をもつ書物としても知られている。この貴重な版を直接参照できたのは関西外国語大学附属図書館の特別な好意による。記して厚く謝意を表したい。

- 2 Besser の愛妻 („Kühlwein“) は 1688 年末、産褥で亡くなった。それに寄せた悲歌 (*Verhängniß getreuer Liebe*) は、後出の Canitz が同じく愛妻を亡くした時のもの(注9参照)と共に、Gottsched とスイス派によっても何回かその抒情性が論じられている。——なお Besser の作品集 *Schriften* の標準版(1732)もやはり König により編纂されたが、この場合にもそれ以前の諸版(1711, 1720)とのテキストの差異が目立つ。——愛妻の伝記はこれら *Schriften* に所収。
- 3 のちのプロセイン王 Friedrich 一世の妃 Elisabeth Henriette は博学と徳操の誉れが高かったが、1683 年、22 才の若さで病死した。
- 4 König 版(S. 185)では、引用文の冒頭は、„Der Untergang eines Tyrannen erwecket insgemein ein solches Frohlocken bey allen;...” となっており、*entdecken* の力強さは消えている。
- 5 史伝によれば、ヘロデ大王は死の直前に、高位高官の者たちを集め彼の死とともに処刑するように、という命令を発した。それは、誰も彼の死を喜ぶ者がいない

ばかりか、むしろ全ユダヤ民族が彼の死をきっかけに悲しむように、ということだった (König の脚注による)。

6 *Aurora oder Morgenröthe im Aufgang...* (1612) の第 8 章, 44。Jacob Böhme: *Sämtl. Schriften*, Faksimile-Neudruck der Ausg. v. 1730, 1. Bd. (1955), 91, § 44 参照。

7 „wenn das sinnreich geschrieben hiesse, so wüste ich nicht was unsinnig heissen sollte.“ (S. 294)

8 とくに *Discourse I*, 12 (Rubeen=Bodmer) 参照。「われわれのよき詩人」Opitz, Canitz, Besser が〈Wortspiel〉を避けようとしたこと, 〈Wortspiel〉をもてあそぶ者は〈guter Witz〉が乏しいことが述べられている。*The Spectator* Nos. 60-62 (true wit と false wit) が根底にあることは明らかである。

9 愛妻 Dorothea („Doris“) は1695年に病死した。友人 Besser は長い *Trauer-Ode* を寄せ, Canitz 自身は27節, 216行からなる *Klag-Ode* を作った。引用されたのは第7節の後半である。この詩は *DNL* 39, 429 ff. にも収録されているが, König 版と同様に第3行目は,

Als die Seligste von diesen,

となっている。しかし *Die vernünftigen Tadlerinnen* では第2, 3版でも vor と読ませている。Gottsched の使用した版によるのか, それとも誤植なのか決定はできない。

10 この詩人とはスペインの Baltasar Gracián (1601-58) である (後出の Bodmer: *Antipatriot* 66 f. による)。

11 前出の注1, 4の *Unterredung* (S. 220) から。 *Cartell des Bramarbas an Don Quixote* の第1節,

Bramarbas, Cyprens Herr und Kayser,

Dem hundert tausend Lorber-Reiser,

Zugleich um seine Scheitel ruhn,

Der durch die Thüren auf den Knien,

Voll Majestät pflegt einzuziehen,

Wie insgemein die Riesen thun...

12 たとえば第55篇のことか。Blackall 64 f. 参照。

V (pp.19-22)

1 スイス派については, Gottsched ほど詳細な評伝はない。Bodmer については, *J. J. Bodmer. Denkschrift zum CC. Geburtstag*. Zürich 1900 に Hans

Bodmer と Hermann Bodmer の兄弟による簡潔な評伝 (*Sein Leben und seine Werke*) があり、最近では Slg. Metzler (M 113) の Wolfgang Bender: *J. J. Bodmer und J. J. Breitinger* (1973) が手引きになる。とくに1720年代の Bodmer については基礎資料として Hans Bodmer: *Die Gesellschaft der Maler in Zürich und ihre Diskurse (1721-1723)*, Diss. Zürich 1895. — また文芸批評家としての Breitinger については, Hermann Bodmer: *J. J. Breitinger (1701-1776). Sein Leben und seine litterarische Bedeutung*, Diss. Zürich 1897. — その他 J. G. Robertson: *Studies in the Genesis of Romantic Theory in the Eighteenth Century*. Cambridge 1923 (Rp. N. Y. 1962) の最終章 (*Italian Influence on Aesthetic Theory in Germany*) と Herbert Schöffler: *Das literarische Zürich (1700-1750)*, Frauenfeld u. Leipzig 1925 の第3章 (*Die Autoren*) および第4章 (*Ideen u. Formen*)。これら二章は *Deutscher Geist im 18. Jahrhundert*, Göttingen 1956 に *Anruf der Schweizer* として収録。 — ほかに J. Baechtold (1892), E. Ermatinger (1933) などのスイス文学史がある。

- 2 とくに Schöffler 参照。英文学者 Schöffler にはピューリタニズムと文学の関係 (いわゆる <Säkularisation> の問題) を追究した労作 *Protestantismus und Literatur, Neue Wege zur englischen Literatur des 18. Jahrhunderts* (1922, 1958) がある。
- 3 No. 267 に始まり 369 に終わる Addison の詳細な『失楽園』分析はフランス訳にはない。原書とフランス訳との照合は Hans Bodmer 7 に。
- 4 *Discourse* の第1部は *The Spectator* (der Erlauchte Zuschauer der Engländerischen Nation) に献呈された。
- 5 詩を一種の絵画, 詩人を一種の画家とみるスイス派の特色がすでにここに現われている。
- 6 厳密にいえば, すでに1713-14年に *Spectator* などを抄訳した *Der Vernünftler* がハンプルクで発行されたが広くは流布しなかった。スイス派がこの雑誌のことを知ったのは *Discourse* より数年ののちである。
- 7 より正確なタイトルは, *Von dem Einfluß und Gebrauche der Einbildungskraft; Zur Ausbesserung des Geschmacks...* 副題として別に *Vernünfftige Gedancken und Urtheile von der Beredsamkeit*. — なお発行地は „Frankfurt und Leipzig“ ではなく Zürich である。検閲にたいする配慮からと思われる。
- 8 *Discourse* I, 20 は DNL 42 にも所収。
- 9 想像力の創造的な機能はスイス派にあっては *Crit. Dichtkunst* I, 8 (Von der Verwandlung des Wirklichen ins Mögliche) の *abstractio imaginationis* にお

いて頂点に達する。

- 10 *Crit. Dichtkunst* I, 9 (Von der Kunst gemeinen Dingen das Ansehen der Neuheit beyzulegen) 参照。
- 11 Hans Bodmer 116 f. および Schöffler 51 ff.
- 12 スイス派の構想では第Ⅰ部は想像力を、第Ⅱ部は〈Witz〉を、第Ⅲ部は趣味を、第Ⅳ部は詩的ジャンルを、第Ⅴ部は崇高 (das Erhabene) を扱うはずであった。このうち第Ⅲ部はイタリアの Calepio 伯との往復書簡 *Brief-Wechsel von der Natur des Poetischen Geschmacks* (1736) で、第Ⅳ部は *Crit. Dichtkunst* (1740) で、第Ⅴ部は *Von dem Wunderbaren* (1740) でそれぞれ形を変えて実現したとみることができる。実現しなかったのは第Ⅱ部の〈Witz〉論である。スイス派にあっては、けっきょく〈Witz〉は想像力の前に後退したといえよう。
- 13 ここには修辞学における伝統的な問題「*res* か *verba* か？」がある。スイス派はまず *res* に力点をおく。これは Gottsched にあっても同様である。*verba* から *res* へ——これが後期バロックから啓蒙時代への移行を端的にあらわしていると言えよう。

VI (pp. 22–26)

- 1 *Der Biedermann* (1. Tl. 1728, 2. Tl. 1729) は *Die vernünftigen Tadlerinnen* ほどの人気がなく、再版されることもなかった。したがって現存するテキストも後者以上に稀れである。本論文の筆者はミュンヘン在のバイエルン国立図書館所蔵のものを複写によって利用することができた。—— E. Reichel 編の *Ges. Schriften*, 3./4. Bde. は100篇のうち62篇を収録しているが、本論文で引用する第75篇は省略。
- 2 „der Herr Rubeen, ein so grosser Verfechter der Franzosen“ (2. Tl., S. 22). たしかにスイス派の教養は最初フランス的ないしイタリア的である。*Discourse* 発行当時、ボードマーもブライティンガーも英語はできなかった。ボードマーはやがて熱心に勉強し、Milton 翻訳にまでいたるが、ブライティンガーは生涯英語には無縁であったという。
- 3 „Diese Beschuldigung beantworte ich mit einem lauten Lachen: Weil mich nichts weniger trifft als dieselbe.“ (S. 23) —— Gottsched の強弁であろう。
- 4 Gottsched の *Crit. Dichtkunst* は1729年10月には書物になっていた。Th. W. Danzel: *Gottsched und seine Zeit. Auszüge aus seinem Briefwechsel*. Leipzig 1848, 72 参照。(König が送付先を指示している。)
- 5 *Der Patriot* の第23篇。
- 6 *Der Patriot, neue und verbesserte Ausgabe...* 3 Bde. Hamburg 1728–29.

(Martens 545 による。)

- 7 „Der gute Geschmack hat sich bey uns auch keines Verfalles zu besorgen, nachdem die trefliche Abhandlung davon, neulich an dem Ende der Canitzischen Gedichte ans Licht getreten.“ (S. 24)
- 8 König の『趣味論』においても「よき趣味」と「sinnreich な著作」との関係が問題になる。しかし <sinnreich> そのものについて理論的な究明はない。詩人 König には——スイス派のように——たとえば Wolff 哲学を援用する意志はなかった。彼の『趣味論』は博学と明快な文章とでわれわれを魅惑する一種のすぐれた随筆である。

Ⅶ (pp.26-35)

- 1 Bodmer 自身が編纂した *Litterarische Pamphlete aus der Schweiz. Nebst Briefen an Bodmern*. Zürich 1781 に所収。
- 2 *Discourse* の第Ⅲ部は Besser に献呈されている。
- 3 その代表者の一人として, König は Menantes の名で知られる Chr. Fr. Hunold (1680-1721) を挙げる。
- 4 J. U. König: *Theatralische, Geistliche, Vermischte und Galante Gedichte* (1713)。
- 5 *La Strage degli innocenti* (1632)。いわゆる「マリニズム」が Marino の名に由来することは言うまでもない。
- 6 以下引用する4通の手紙は, Alois Brandl: *B. H. Brockes ... Ein Beitrag zur deutschen Literatur im 18. Jahrhundert*. Innsbruck 1878 の付録として翻刻された。
- 7 匿名で, しかも Pietsch には無断であったことから, Gottsched の動機についてはいろいろの臆測がなされている。
- 8 Danzel 70 参照。
- 9 *Irdisches Vergnügen in Gott* のⅠ—Ⅴ部からの選集 *Auszug der vornehmsten Gedichte...* 1738 (Nachdruck 1965) から次の用例を拾い出すことができる——
1) ungeheuer schön (*Die Berge*, S. 124), 2) gräßlich schön (*Der Winter*, S. 448), 3) entsetzlich angenehm, erschrecklich schön (*Betrachtung einer sonderbar-schönen Winter-Landschaft*, S. 461)。とくに3)の文脈は1712年のオラトリウムにおける <erbärmlich schön> の文脈に類似している——

Kurtz: wircklich war, zu dieser Zeit, die Welt,
Mit Schönheit und Gefahr, mit Lust und Last erfüllt,
Sie war ein lieblich Schrecken-Bild;

Entsetzlich angenehm, erschrecklich schön

(Man sage, was man will) war alles anzusehn.

このような実例からみても, *antithesis* と *oxymoron* が Brockes の文体特徴の一つである。——しかし同じ1726年6月15日付の手紙で König は, このような「グロテスクな表現」をめぐって当時フランスでも論議があったことを伝えている。すなわち次のような言回しである, *C'est une femme, qui est merveilleusement-laide* もしくは *effroyablement-belle*。〈趣味〉にからむ「時代の問題」であったとみるべきであろう。——なお Brockes にみられる実例は, 1750年代に Moses Mendelssohn などが追究した(快と不快との)「混合感情」を連想させる。その代表的なものは崇高の感情と同情とであるが, 少なくとも前者は Brockes の実例と無関係ではない。

10 前出の注Ⅵ4を参照。

11 Grimm (*erbärmlich* の項), Trübner(*erbarmen* の項)は Brockes に〈*erbärmlich schön*〉の用例があるとし, それぞれ 3(699), *Irdisches Vergnügen in Gott* 3(1724) 699 を出典としている。それは *Die lehrende Ruinen* の一節をさす——

Die unterbrochnen Gänge,

Die nicht zu zählen sind, die kommen mir

Als lauter Grotten-Wercke für:

In welcher Nettigkeit und Moder, Lust und Grausen,

Verachtung, Majestät, erbärmlich-schön,

Vermischt, verwirrt, vereint zu sehn;

Wo Barbarey und Kunst verknüpft zusammen hausen.

やはり前出の注9の用例と軌を一にしている。それにしても, これらの辞典はなぜ1712年のオラトリウムにおける用例を挙げなかったのだろうか?

12 出版地が „Frankfurt und Leipzig“ とあるのは, やはり検閲にたいする配慮からと思われる。

VIII (pp.35—42)

1 たとえばE章 (Von den Dichtungen überhaupt) で「よき詩作品の根本規則」(die allerersten Grund-Regeln einer guten Dichtung)として列挙する6ヶ条などは, 文学の目的と方法にかんする一種のマニフェストであり, 啓蒙時代の文学観一般がよく示されている。

2 本論文ではテキストとして „Neue Auflage hin- und wieder vermehret ... Halle 1747“ を使用したが, これが何版にあたるかは不明(ちなみに第9版は1743年)。——この書物の第5, 6章は *DLA* 2にも所収。—— Wolff のこの

書物と18世紀ドイツ啓蒙時代の文芸論との関係に触れたものとして、従来 Alfred Baeumler: *Kants Kritik der Urteilkraft. Ihre Geschichte und Systematik*. 1. Bd. Halle 1923 (*Das Irrationalitätsproblem in der Ästhetik und Logik des 18. Jahrhunderts bis zur Kritik der Urteilkraft* として1967年に再版) と Paul Böckmann: *Formgeschichte der deutschen Dichtung*. 1. Bd. Hamburg 1949 が知られているが、近年では Joachim Birke: *Christian Wolffs Metaphysik und die zeitgenössische Literatur- und Musiktheorie: Gottsched, Scheibe, Milzer*. Berlin 1966 („Quellen u. Forschungen zur Sprach- u. Kulturgeschichte der german. Völker“ N. F. 21) がある。

- 3 § 366. Man siehet aus den gegebenen Exempeln, daß man einen Fall in den anderen verkehret wegen der Aehnlichkeit, die sie mit einander haben (§. 18). Und gehöret demnach zu hurtigem Gebrauche des Grundes der Verkehrung, daß man die Aehnlichkeit leicht wahrnehmen kan. Wer hierzu aufgeleget ist, den nennet man *sinnreich*. Und die Leichtigkeit die Aehnlichkeit wahrzunehmen, ist eigentlich dasjenige, was wir *Witz* heissen...
- 4 § 850. Wer viele Deutlichkeit in den Begriffen der Dinge hat, und also genau heraus zusuchen weiß, worinnen eines einem andern von seiner Art ähnlich und worinnen es hinwiederum von ihm unterschieden ist, derselbe ist *scharffsinnig*. Und also ist die *Scharffsinnigkeit* die erste Art der Vollkommenheit des Verstandes, die sich sowohl auf die anschauende, als figürliche Erkenntniß erstrecket (§. 316). Und demnach ist einer um soviel scharffsinniger, je mehr er in einer Sache, die er sich vorstellt, entdecken kan als der andere...
- 5 § 858. Wer scharfsinnig ist, der kan sich deutlich vorstellen, auch was in den Dingen verborgen ist und von andern übersehen wird (§. 850). Wenn nun die Einbildungs-Krafft andere Dinge hervorbringt, die er vor diesem erkant, welche mit den gegenwärtigen etwas gemein haben (§. 238 [235]); so erkennet er durch dasjenige, was sie mit einander gemein haben, ihre Aehnlichkeit (§. 18). Derowegen da die Leichtigkeit die Aehnlichkeit wahrzunehmen der Witz ist (§. 366); so ist klar, daß Witz aus einer Scharfsinnigkeit und guten Einbildungs-Krafft und Gedächtniß entsteht (§. 249). — § 859. ... wo es an Scharfsinnigkeit fehlet, da nimmet man nur Aehnlichkeit wahr, die bald in die Augen fällt: hingegen wo man scharfsinnig ist, da entdecket man Aehnlichkeiten, die nicht ein jeder gleich wahrnimmet. In dem ersten Falle kan man auch den Schein für das Wesen nehmen: in dem anderen Falle aber ist jederzeit eine wohlgegründete Aehnlichkeit vorhanden. — § 860. Je mehr also ei-

ner Aehnlichkeiten zu entdecken weiß, je mehr hat er Witz und je sinnreicher ist er (§.366): ingleichen je verborgenere Aehnlichkeiten einer entdecken kan, je grösser ist seyn Witz. Hingegen ist einer mit geringem Witze begabet, wenn er gar schwer Aehnlichkeiten entdecket [entdecken] kan, und ohne allen Witz ist, der nicht sehen kan, wenn ein Ding dem andern ähnlich ist.

6 本論文では *Der Vernünftigen Gedancken von Gott ... Anderer Theil, bestehend in ausführlichen Anmerckungen ...* 4. Aufl. 1740 により引用。

7 § 316 によれば, 事物そのものの (直接的な) 表象にもとづく「直観的認識」(die anschauende Erkenntniß) にたいして, 言語などを媒介とする (間接的な) 表現にもとづくのが「符牒的認識」(die figürliche Erkenntniß) である。

8 §235. Die Vorstellungen solcher Dinge, die nicht zugegen sind, pfleget man *Einbildungen* zu nennen. Und die Kraft der Seele dergleichen Vorstellungen hervorzubringen, nennet man die *Einbildungs-Kraft*.

9 § 249 Deswegen nun, daß wir Gedancken, die wir wieder von neuem hervorbringen, erkennen können, daß wir sie schon vor diesem gehabt, eignen wir der Seele ein *Gedächtniß* zu. Das Gedächtniß ist also nichts anders als das Vermögen Gedancken, die wir vorhin gehabt haben, wieder zu erkennen, daß wir sie schon gehabt haben, wenn sie uns wieder vorkommen. このやや特異な「記憶」の定義について Wolff は §§ 250 ff. で説明をつづける。 *Anmerckungen* では § 79 において。

10 *Anmerckungen* § 320.[...] Was ich von dem Witze gelehret habe, dienet nicht allein die Redner und Poeten, auch Comödien- und Tragödien-Schreiber, sondern auch selbst die Aurores, welche die Disciplinen und dahin gehörige Sachen beschrieben [beschreiben?], zu beurtheilen, und bey den Erfindern und ihren Erfindungen hat man auch darauf gesehen[...]

11 Ich weiß keinen Teutschen Schreiber / der gründlichere und deutlichere Unterrichte über dieses Capitel gegeben habe; Und kan darum nicht heimweisen / warum unsere Teutschen Verfasser ihre Untersuchungen von dem Sinnreichen in den Schrifften nicht auf diese Grund-Sätze bauen; sondern lieber ihrem eigenen verworrenen Kopfe folgen wollen. (S.46)

12 Baeumler 149 もこの個所について, 「Gottsched の定義は tautologisch である」ことを認めている。

- 13 Bodmer は *Spectator* の「フランス訳1部, 第49篇」を指摘するが, これに該当するのは原書 No 62 のことと思われる。
- 14 „Woraus die Deutlichkeit ihrer Begriffen und ihre Kundschaft in der teutschen Sprache / worauf sie sich doch am meisten einbildet / abzunehmen.“ (S.49)
- 15 この個所で Bodmer は Canitz の詩節の第1行が, 元来, Man denckt ... であることを指摘する(前出の注N 1 参照)。スイス派はこの一句(ただし最初の5行)をすでに *Discourse* N部, 第17篇のモットーにしていた。おそらく当時の人びとには馴染ぶかいものだったと思われる。—— Bodmer は Gottsched の改変を非難すると同時に, ここでも Horatius の AP 309 (*Scribendi recte sapere est et principium et fons*) を引用する。思想と文章もしくは *res* と *verba* の相即性を説いた古典的な出典である。この Horatius の一行のもつ意義は Gottsched にとっても同様であった。たとえば *Crit. Dichtkunst* 第4版(1751)のとびらを参照。
- 16 Bodmer はこのことを次のように表現している, „Jedermann siehet leicht / daß die aus Hrn. von Besser Schrifften angeführte Stelle weder sinnreich / noch scharfsinnig verdienet genennet zu werden: Der wahre Grund dessen ist / weil darinne keine Vergleichenungen ähnlicher Dingen vorkommen / indem sie aus blossen Vernunft-Sätzen zusammen gesetzt ist.“ (S.52 f.)
- 17 議論の混乱は Wolff による一連の定義そのものにも原因があるように思われる。すなわち, 彼にあっても <scharfsinnig> と <sinnreich> の区別が十分に明確ではない。<scharfsinnig> は <sinnreich> の成立要素である (§ 858) とともに, また強度の <sinnreich-witzig> という一面をもつ (§ 850)。Baeumler 150 をも参照。——要するに Bodmer は, Gottsched と同様に, 比喩的表現における適度の類似性を要求する。しかし彼はその原理として, Gottsched のまったく言及していない <Scharfsinnigkeit> を強調するのである。
- 18 Bodmer は出典として Horatius の *Carmina* 1, 4 を挙げる (*Pallida Mors aequo pulsat pede pauperum tabernas / Regumque turris*)。—— Gottsched による引用例の出典を一つ, 一つ指摘しようとする態度が目立つ。博識において劣らぬことを誇示しようというのだろうか？。
- 19 1. die Begriffe durch die Vergleichung mit andern / zwischen welchen eine gewisse Aehnlichkeit waltet / in ein klärer Liecht zu setzen / und gleichsam vor die Augen zu bilden... 2. Den Ausdrücken eine besondere Krafft / ein Gewicht und Nachdruck zu geben / damit sie desto tieffer in das Gemüthe des Lesers dringen / wann sie durch ihre reiche Bilder ähnlicher Dingen die Sinne und das Gemüthe füllen ... 3. Durch die Entdeckung der

verborgenen Aehnlichkeit der Dingen den Geist des Menschen zu ergötzen und zu belustigen ... (S. 70 f.)

20 18世紀前半のドイツにおける詩的言語の成立については、E. A. Blackall (前出の注1 12 参照) の大著に教えられるところが多い。——最近の Gottsched とスイス派にかんする研究課題として、両者におけるバロック詩学ないし修辞学の諸要素の究明がある。これは近年における活潑なバロック研究に関連するものであるが、この観点からすれば、Gottsched とスイス派は古い皮袋に新しい酒を盛ろうとしたことになる。たとえば H. P. Herrmann: *Naturnachahmung und Einbildungskraft. Zur Entstehung der deutschen Poetik von 1670 bis 1740*, Bad Homburg v. d. H. ... 1970 参照。ただし H. K. Kettler: *Baroque Tradition in the Literature of the German Enlightenment 1700—1750*, Cambridge 1943 などの研究がすでにある。——詩的言語の中心をなす隠喩(メタファー)が18世紀前半に「多様の統一」(die Einheit in der Mannigfaltigkeit)として論理づけられた過程を、ひろい精神史的視野から叙述しているのは、やはり Baeumler である。

21 E. Wolf 2. Bd. (前出の注1 1 参照) は 1730 年代の両者の往復書簡を付録にしている。対立と協調の要素が混ざり合った両者の関係はけっして簡単ではない。

22 *Crit. Dichtkunst* II 7 (Von der Schreibart insgemein), 331. その脚注で Tadlerinnen Stück XXIV とあるのは XXXIV の誤植である。

23 手許にある *Crit. Dichtkunst* の第3版(1742, Neudruck 1973)と第4版(1751, Nachdruck 1962)では確認できなかった。

24 Baeumler 150 f. に立ち入った解釈がみられる。要するに、Bodmer がイギリスへ傾いたこと、同時に Wolff から離れたことが主なる原因とされる。しかし、「おそらく Bodmer は、Wolff 哲学の領域ではライプチヒの論理学と形而上学の教授にはやはり太刀打ちできないことを悟って、Wolff は Gottsched に任せたのであろう」(Wahrscheinlich hat Bodmer gesehen, daß er auf dem Boden der Wolffischen Philosophie doch nicht neben dem Professor der Logik und Metaphysik in Leipzig bestehen könne, und hat deshalb Wolff Gottscheden überlassen, S. 151, Anm.) というのは、はたして正しいだろうか？。